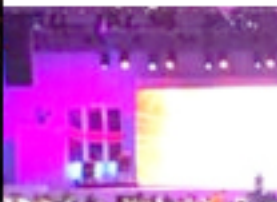


Cape Town 2010

the Lausanne movement

THE THIRD LAUSANNE CONGRESS
ON WORLD EVANGELIZATION



第3回ローザンヌ世界宣教会議 日本参加者報告

2010年10月17日～24日 南アフリカ ケープタウン

日本ローザンヌ委員会

目次

日本ローザンヌ委員会について	3
第3回ローザンヌ世界宣教会議 日程表	4
ディアスポラ宣教協力 青木 勝	5
世界に漲る神の国 有賀喜一	6
第3回ローザンヌ世界宣教会議 植木英次 ^{ひでじ}	8
「憧れ」を「実現」に 大坂太郎	9
ケープタウン報告「最前線からの挑戦」 大田裕作	11
インパクトのある第三回ローザンヌ宣教会議 — 三つ・四つのインパクト 金本 悟	12
日本における和解の福音の受肉を願って 鎌野直人	14
「信仰によるアクションへ」 (第三回ローザンヌ世界伝道会議に出席して) 倉沢 正則	16
蠢く人々の中で神は今も動いておられる 黒田摂	17
世界の痛みに向き合う福音理解 根田祥一	19
運動体と組織体の連携を期待して 竿代照夫	20
会議三日目の朝：～苦しみ～ 清水 担 ^{なん}	22
キリストのいのちを生きる 末松隆太郎	23
心はうちに燃えていたではないか 杉本玲子	25
An Unforgettable Experience ポール鈴木	27
ローザンヌ世界伝道会議のレポートその1 高奈美香	28
ケープタウン 2010 から受けた宣教的示唆 高見澤栄子	29
聖徒の交わりから何かが起きる 立石充子 ^{あつこ}	30
Face to Face 渡真利彦文 ^{とまりひこふみ}	31
「純粹な音を奏でる歩み」 永井敏夫	33
「6人から世界へ広がるパートナーシップ」 永井信義	35
「継承、そして変革」—第3回ローザンヌ世界宣教会議にて— 中台孝雄	37
「全教会が全福音を全世界へ」をテーブルで 西岡義行	39
ローザンヌから日本へ、日本からローザンヌへ 錦織 寛 ^{にしこおり}	41
ネットワークムーブメントが生かされるために 福井誠	43

包括的な福音を全教会の対話の中で	福田崇	44
ケープタウン2010年の観察と未来への展望	ゲーリー藤野	48
Cape Town 2010 の直後の印象と考察	藤原淳賀	50
第3回ローザンヌ世界宣教会議に出席して	正木牧人	54
2010年ローザンヌ世界宣教会議雑感	松崎ひかり	55
21世紀の世界と日本の宣教のチャレンジを受けて	柳沢 美登里	58
音楽について	山中先代	60
CT2010 報告	山中猛士	62
「人を用いて、宣教を成し遂げられる神様」	吉田 隆	66
「ローザンヌ運動の幻：全世界の福音の流れを集めて、聖書的世界宣教の大河となす。」	吉本牧人	68
アフリカ大陸からの喜望(Good Hope)	米内宏明	70
第3回ローザンヌ世界宣教会議に出席して	渡部信	72



日本ローザンヌ委員会 Japan Lausanne Committee

651-0052 神戸市中央区中島通 2-3-5
 神戸ルーテル神学校内 関西ミッションリサーチセンター気付
 電話: 078-221-6956 電子メール: roozannu@gmail.com

日本ローザンヌ委員会について

日本ローザンヌ委員会は、ローザンヌ運動の日本の責任主体であり、第3回ローザンヌ世界宣教会議参加者を中心に、ウェブサイト、セミナー、祈り会などを通じて、日本で運動が継続していくように励ましていくことを大切にしています。

2010年12月現在、次のような活動を実施及び計画しています。

- ・ ケープタウン^{コミットメント}決意表明の翻訳をしています。
- ・ 2012年6月、クリス・ライト師の来日が予定されています。「ミッション・オブ・ゴッド」の翻訳出版記念講演会が開催される計画があります。
- ・ 今後も日本の教会や団体と協力していきます。
- ・ アジア・ローザンヌ世界宣教委員会との協力も継続していきます。2011年6月にモンゴルで第7回アジア・ローザンヌ宣教会議が開催される予定です。(2014年には、第8回アジア・ローザンヌ会議が日本で開催される可能性があります。)

日本におけるローザンヌ運動についてご関心のある方は、日本ローザンヌ委員会ウェブサイト(2010年12月現在準備中)をご覧ください。また、roozannu@gmail.comまでご連絡ください。

委員長	金本悟	会計	柳沢美登里
副委員長	末松隆太郎	ウェブ	鎌野直人
書記	立石充子	委員	オー マイケル
神学	西岡義行	委員	中台孝雄
祈祷	永井敏夫	委員	正木牧人
広報	根田祥一	委員	リトル デイル
財務	青木勝		

第3回ローザンヌ世界宣教会議 日程表

SAT OCT 16	SUN OCT 17		MON OCT 18	TUE OCT 19	WED OCT 20	THUR OCT 21	FRI OCT 22	SAT OCT 23	SUN OCT 24	MON OCT 25
A R R I V A L	W O R S H I P A T L O C A L C H U R C H E S		THE GOSPEL		THE WORLD			THE CHURCH		D E P A R T U R E
			TRUTH	RECONCILIATION	WORLD FAITHS	F R E E D O M D A Y	PRIORITIES	INTEGRITY	PARTNERSHIP	
		8:45 - 10:15 (8:30 music)	Plenary 1 Celebration of the Bible <i>Ephesians 1</i> Ajith Fernando	Plenary 1 Celebration of the Bible <i>Ephesians 2</i> Ruth Padilla DeBorst	Plenary 1 Celebration of the Bible <i>Ephesians 3</i> John Piper		Plenary 1 Celebration of the Bible <i>Ephesians 4:1-16</i> Vaughan Roberts	Plenary 1 Celebration of the Bible <i>Ephesians 4:17-6:9</i> Calisto Odede	Plenary 1 Celebration of the Bible <i>Ephesians 6:10-24</i> Ramez & Rebecca Atallah	
		45m	BREAK	BREAK	BREAK		BREAK	BREAK	BREAK	
		11:00 - 12:30 (10:30 music)	Plenary 2 Making the case for the TRUTH of CHRIST in a Pluralistic, Globalized world Carver Yu Michael Herbst Os Guinness	Plenary 2 Building the PEACE of CHRIST in our Divided and Broken World Antoine Rutayisire Joseph D'Souza	Plenary 2 Bearing witness to the LOVE of CHRIST with People of Other Faiths Michael Ramsden Benjamin Kwashi		Plenary 2 Discerning the WILL of CHRIST for 21st Century World Evangelization David Yoo Paul Eshleman	Plenary 2 Calling the CHURCH of CHRIST back to Humility, Integrity and Simplicity Femi Adeleye Chris Wright Elke Werner	Plenary 2 Partnering in the BODY of CHRIST Toward a New Global Equilibrium Patrick Fung David Ruiz	
		1hr30m	LUNCH	LUNCH	LUNCH		LUNCH	LUNCH	LUNCH	
			Multiplexes People at Work: Preparing the Whole Church	Multiplexes Mobilizing Resources for World Evangelization	Multiplexes M*ss*ng Peoples: The Unserv'd "One-Fourth" World		Multiplexes Crafting an Oral Story Bible	Multiplexes Ethics, Emerging Technologies and the Human Future	Multiplexes Hope for the Christian Church through Global Incarnational Partnerships	
		2:00 - 3:30	Media Messages Matter: On Global Technologies, Glocal Trends, and Gospel Truth	Wealth, Poverty & Power: Effectively Responding through the Global and Local Church	Ministering to Scattered Peoples		How to Communicate the Truth to Four Billion Oral Learners	Poverty, Prosperity and the Gospel	Local Leaders in the Global Church	
			Dogma and Diversity: Can Evangelical Truth Effectively Face Up to Secularity in a Pluralistic World?	Peace to the Nations: Ethnicity in the Mission of God	Globalization		How do we Build a New Generation of Christ-like Leaders	Men & Women: A Powerful Team for the Completion of the Great Commission	Scripture in Mission	
			A Fresh Approach to Witness in the 21st Century: A Global Perspective	The Environmental Crisis, the Gospel, and Christian Witness			Embracing God's Global Urban Mission		There are No Unreached Children	
		30m	BREAK	BREAK	BREAK		BREAK	BREAK	BREAK	
		4:00 - 5:30	Regional Gatherings	Dialogue Sessions	Dialogue Sessions		Dialogue Sessions	Dialogue Sessions	Regional Gatherings	
		DINNER	DINNER	DINNER	DINNER		DINNER	DINNER	DINNER	
		OPENING CEREMONY Doug Birdsall & Henry Orombi (7:15 start music)	Plenary 3 SUFFERING CHURCH RELIGIOUS FREEDOM ASIA China India & Korea	Plenary 3 BROKEN WORLD HIV/AIDS Human Trafficking MIDDLE EAST	Plenary 3 MEGACITIES Tim Keller DIASPORA LATIN AMERICA AND CARIBBEAN		Plenary 3 NEXT GENERATION CHILDREN & YOUTH AFRICA	Plenary 3 RESPONDING TO GOD IN WORSHIP AND PRAYER EURASIA AND WESTERN WORLD Nicky Gumbel	CLOSING CELEBRATION COMMUNION Henry Orombi & Lindsay Brown	
		9:15 - 10:45	Film Festival	Film Festival	Film Festival		Film Festival	Film Festival		

第3回ローザンヌ世界宣教会議

ディアスポラ宣教協力 青木 勝

Diaspora Network for Japanese (<http://www.dnjonline.org/>) コーディネータ

1. **歴史感と世界潮流**; 第2回(1989 Manila)から第3回(2010 Cape Town)へ向かう20年余り、世界は戦争の世紀末から地球と人類の平和を希求する新しい世紀へ大変革が進展した。冷戦終結以降の世界変革は、IT インフラの技術革新とグローバル化に支えられ、世界の地域社会や国際企業、教会やNPOなど様々なコミュニティは、多様な民族や文化を受容しつつ持続可能な発展と平和のテーマに取り組んでいる。世界の地域社会において、異邦人ディアスポラがブリッジビルダーになり、世界貢献と福音継承に挑戦してきた。アフリカの大地に Whole Gospel, Whole Church, Whole World が響きわたる中、Invictus を以って平和国家を形成しつつある20年余りの南アフリカにおいて、第3回会議が無事に実現されたことは、神の大いなる御業でありめぐみであった。
2. **神の栄光**; 神を仰ぎ見て神の栄光をあらわすために召されたことを覚え、祝福を受け継ぐ次世代が励まされるため、民族の歴史や文化の壁を超えて世界各地域における和解の輪がひろがりつつある。テーマ聖句は、「神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のこぼれを私たちにゆだねられたのです。」(第2コリント5:19)でした。エペソ書を通して、毎朝聖言の分かち合いと祈り合いが深められた。地域集会では日本、韓国、モンゴルの代表者交流が深められ、アジアの地域協力が多重連携して行くことが分かち合い祈り合われた。
3. **マーケットプレイス伝道やディアスポラ宣教協力**; Dialogue Sessions では、留学生宣教協力と次世代リーダー育成について、欧米亜とアフリカの地域別報告会が行われ、日本の Int'l Student Ministries について 2010.10.20 に報告した。また、アジアからの留学生に関する Campus and Marketplace Ministries として Sustainability & Peace や Inclusion and Diversity に取り組む構想を 2010.10.22 に報告した。日本政府が主導する2020年目標課題であるグローバル30計画(留学生を30万人に倍増させる、英語で学位がとれる)と生物多様性対応計画を通して、アジア人ディアスポラによる東アジアの宣教協力がひろがりつつあることを報告した。LCWE3 と同時期に COP10 が日本の名古屋で開催され、200ヶ国1万人以上の代表による名古屋議定書の合意を覚え祈りが積み重ねられた。日本におけるディアスポラ宣教協力は、All Nations Returnees Conference 09/10 を通して、邦人帰国者や国際人から在留外国人や在日留学生へ拡大され、内外連携が強化されている。
4. **内外宣教協力による日本の世界貢献**; クリスマン人口統計により Unreached People No.2 と広報されている日本を通し、東アジアへの宣教協力が世界に情報発信された。アジア人ディアスポラの宣教協力を通し、東アジアの平和と共生が実現され、ローザンヌ運動が世界宣教協力や世界貢献に活用されることを祈り願う。米中双方の首脳が交替する2012年、Urbana12 や ANRC12 を通し主の聖業の拡大を祈り準備を推進して行きたい。 以上

世界に漲る神の国 有賀喜一

全日本リバイバルミッション代表 JCGI ネットワーク理事長

2010. 11. 17

1966年、ベルリンでの世界宣教会議に33歳で出席を許され、「**One Race, One Gospel, One Task**」の主題で、特にWCC側の「社会的福音」の強調に対して、ビリーグラハム氏は大変な重荷をもって、世界的に福音主義諸教会を召集して、神学的な定義付けをしました。既に教会開拓から本田弘慈氏の協力伝道者として主に仕えていましたのでこの宣教会議は、私にとって大きな確信の時となりました。

1974年、第一回ローザンヌ世界宣教会議は、「**Let The Earth Hear His Voice**」の主題で開かれ、特に宣教方策が取り上げられました。当時最も注目され、全体に紹介された方策は二つでした。「爆発伝道」(アメリカ・フロリダのフォートラウダーデールのジェームズ・ケネディ氏)、「深みの伝道」(ラテンアメリカ諸国で実践されたケネス・ストラッカン氏の浸透伝道)。この浸透伝道は日本の総動員伝道に適用実践されたものです。日本では1970年四国で実践された後、委員長であられた羽鳥明氏の推薦でフラー神学大学の世界宣教と教会成長学部で一年半研修し、帰国後、総伝と教会成長の視点で全国に展開してまいりました。

このローザンヌでは二つの新しい展開がありました。一つは初めてペンテコステ諸教会からオブザーバーとして1,000人が加わったこと。もう一つは、ストット氏の提案で「福音の社会的適用」が以前の「福音」の定義に加えられたことでした。

1980年パタヤで「**How Shall They Hear**」の主題で、13の領域で実際に相手側に配慮した伝道の実際を検証して、纏めました。私は「仏教徒伝道」を担当して諸先生とともに奉仕しました。

1989年、第二回ローザンヌ・マニラ大会では、「**Whole Gospel, Whole Church, Whole World**」で、参加者は福音派とペンテコステ派と半々でした。「福音」には、救霊、社会的適用(飢餓)、そして全人的救いの故に、体のいやし、内的いやし、悪霊解放まで加えられた。「教会」は文字通りキリストの教会として一つの教会が確認された。「世界」は宣教の手の届く範囲にあると宣言された。

私は摂理の導きの中で、ベルリンからマニラまでの全部の世界宣教会議に出席させていただき世界の44年に及ぶ流れを肌で実感してきました。そこで2010年のケープタウンにも是非出席したかったのです。

2010年、第三回ローザンヌ世界宣教会議

1966年のベルリンでは、「福音」の神学的定義、1974年のローザンヌでは、「福音」の効果的戦略、と福音の社会的適用、1989年のマニラでは、福音の全部、教会の聖書的一致、世界福音化への重荷と積極的前進が宣言されて参りました。

この世界的な宣教の流れがどのように21世紀に流れていくのだろうか私の大きな関心でした。幸いダグバーザル氏の特別卒の来賓という立場で参加が許されました。正木先生には特別なご尽力をいただき深謝いたします。

聖書神学的理解の健全さ

毎日エペソ書からの神の視点での教会、宣教、世界の見直しは素晴らしいことでした。

特に教会の一致については、人間が作り出すのではなく、神がすでに与えておられる主にある一致に、主にある私たちが如何に成熟しているかが実現の秘密であるということに深く教えられ祈られました。この会議そのものが一致の証でした。

テーブルグループの深い分かち合い

私のテーブルでは、ウィートン神学校長、ドイツの神学校実践神学教授、ネパールキリスト教連盟理事長という4人で本音の成熟した分かち合いでした。ウィートンではペンテコステ教会からの入学も積極的に受け入れており、良く理解して混乱は無いということでした。ドイツにおいてはやはりまだ両陣営の一致は祈りを要するということでした。ネパールでは、完全に教会の一致は始めから実現しているということで神を崇めていました。

日本の教会への挑戦

神によって祝福されている知力、技能力、経済力、指導力が国際化している現実、に、しっかり私たちが国際的な視野に立って、仕えていくべきことを強く挑戦され、より深い献身を主に捧げました。「汝死に至るまで忠実なれ」(黙2:10)

第3回ローザンヌ世界宣教会議 ^{ひでじ}植木英次

インマヌエル聖宣神学院

●「一番印象深かったこと」：宣教に携わる者たちの姿勢など、倫理の問題が重く取り上げられたと強く感じた。このことは、会議が開催される前から **Global Conversation** サイトに掲載されていた講演のレジュメを読んでみて感じ取ることができた。そして、参加前のわたしの期待を大きく膨らませた。このことはまた、講演のみならず、この大会の実践に顕著に表れていたと思われる。その一端として、欧米の諸教会が参加者数を抑え、背後からこの大会を支える側に回った。わたしのテーブルでも欧米地区からはカナダ人が一人であった。

その結果、欧米人主導のにおいが薄れ、「世界から世界へ」の世界宣教を実感する大会であった。キップリングが、「白人の重荷をせおえ／お前たちの生んだ最上の子らを送れ」と詩にうたった、「白人の重荷」の時代は確かに過去のものとなった。

しかし、上記のような雰囲気漂っていた大会ではあったが、金曜日午前に開かれたローザンヌ立案グループの議長によるセッションでは、旧来の欧米人主導の動き、「上から目線」の語り口にがっかりさせられた。テーブルに配布されていたアンケート用紙を読んでいて、お願いという姿勢もなく個人情報を含む項目を記入させるという態度に憤りをも感じた。この会議の機構や経済とも密接にかかわることだとは思いますが、理解のみならず、心の底から仕える姿、僕の姿の宣教が定着するには数十年要するようにも感じた。

もうひとつ印象に残ったことは、キリストの教会の多様性を実感したことだ。賛美の選択、会衆の姿、聖餐式におけるドラマの意味合いの強調など、自らとは異なった伝統にいる方々の教会文化に触れることはとても幸いなことだった。

●「問題意識と今後の課題」：人身取引、HIV・AIDS、信教の自由、内戦、貧困など、世界が直面している問題について、各地からの報告と、そのような問題に対してどのように取り組んでいこうとするのか関心を持っていた。しかし、それらについては、どれも表面的に触れただけだった。アフリカでこの会議が開かれていたにも拘わらず、内戦再発の危機にあるスーダンのために祈りを請い、みんなで祈ることもなかった。貧困問題をテーマにした分科会に於いて、数名の人がマイクを手にし、この会議に於いて貧困問題の解決にむけて何らかの声明文を出したいと発言していた。

このようなことは、ローザンヌ運動の体質、ローザンヌ会議の組織自体からくる弱点なのではないかと思う。4,000 人の参加者を見込んだ会議を計画するにしても、経済的な分担が一部の人たちに偏っているのではないかと思う。経済的分担の偏りは、どうしても目的と関心の偏りに表れるであろう。地域や国ごとの組織を強化して、応分の経済的分担を実行する必要があるであろう。そして、一部の人たちで次のローザンヌ会議が計画されるのではなく、国や地域の組織の盛り上がりの結果として世界宣教会議を立案してゆく方向性が求められると思う。

「憧れ」を「実現」に 大坂太郎

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団 ベテルキリスト教会牧師

「ローザンヌ」と聞くと神学校時代を思い出します。始まったばかりの学寮生活で振り分けられた掃除担当区域にローザンヌ誓約とマニラ宣言が誇らしげに掲げられていました。語学の勉強よろしく、それを読み読み掃除をやり、その内容の深さに一種の「憧れ」を覚えました。それから幾星霜、今回「憧れ」の会議に参加できたことは神の恵みというほかありません。以下にこの会議で学んだことを2つ述べたいと思います。

1. キリストを物語ること

「福音は概念ではなく、新鮮な語り口を必要とするストーリーである（ケープタウン決意表明より）」近代主義のコンテクストにおいてはもちろん時代の要請にこたえるという必要はあったのですが、福音の提示がなにやらロジカルでドグマティックな概念の伝達になっていることが多かったように思いますし、自身の伝道説教を見ても物語的提示というよりもむしろ概念的な提示が多かったように思います。しかしポストモダンの時代において物語の復権が叫ばれている今こそ、私たち福音主義者は共同体形成の基盤となる「大きな物語」、すなわちイエス・キリストの救済の物語を「新しく」語らねばならないことをこの会議において再確認しました。さらにこの物語はまた単なる事実のない「物語」ではなく、「歴史的な事実性」に立脚したイエスキリストの「ストーリー」であり、すべてのクリスチャンはこの「ストーリー」を失われた存在である人類に向かい、真実な愛を以って語らなければならないのだということを強く教えられました。

2. キリストを生きること

数多くの分科会、それぞれが非常に印象的でしたが、特に面白かったのは「キリストに似るリーダーシップ」と称するセッションでした。最初に人間的・権威的・強権的なリーダーシップとして、ルワンダの将軍が開催した会議（？）の様子が映し出され、セッションの最後にはキリストに似る、サーバントリーダーシップのモデルとして映画「インビクタス―負けざる者たち―」の中で、モーガンフリーマン扮するネルソンマンデラ大統領自らがチームの主将にお茶を振る舞い、談笑しながらリーダーシップを教えていくシーンが紹介されました。「仕えられるためにではなく、仕えるために」来られたイエス・キリスト。この人を伝えようとするなら、「この人を見よ」と指をさすにとどまらず、私たちの内側に住まわれる生けるキリストを現していくこと（ピリピ 1:21）が必須であることを現代的なプレゼンテーションから教えられ感謝でした。

このほかにもテーブルグループリーダーの奉仕を通して、未来を担うアフリカのクリスチャンリーダーたちの頼もしさにびっくりしたり、日本人参加者の諸先生方と交わりを深め、立ち話で2時間も聖書や神学の諸課題、部屋では趣味（！）について熱く語り合ったりと神学生に戻ったような10日間でした。ここ数年、アウトプットのためのインプット（説教準備、授業準備）ばかりで少々くたびれていた私にとってこの会議は素晴らしい純粋な「インプット」の機会でした。かつては「憧れ」であったローザンヌですが、今はその精神（全福音を、全教会が、全世界に）を自らのミニストリーにおいて少しでも「実現」するために走り出したところです。感謝しつつ。

ケープタウン報告「最前線からの挑戦」 大田裕作

関西聖書学院

「全福音を、全教会が、全世界に」というテーマのもとに会議が進む。福音とは何かを問い直し、教会の本質と和解を模索し、テーマは原理的なテーマから実際的なものへと進んでいく。この福音を最前線に如何に早く、かつ正確に届けるかの挑戦へと推移していく。会議としての4日目、22日(金)登壇した Paul Eshleman の表情が会場の大スクリーンに映し出される。紳士的な語り口調で始まった講演の途中から彼の顔がある感情に揺すぶられ始める。目が潤みはじめる。「2千年待たせてきた人々がいる」「聖句の1行も彼らの言葉に翻訳されていない。1行も」

1) 聖書の1行も

5月の東京でのエディンバラ100周年記念大会でも登壇した彼の口から Oral Learner、Oral story なる概念を初めて聞き、大いに触発されていた。今回 Bible Poverty という用語を耳新しく聞かされた。南北の富の不均衡な分配、衛生や飢餓、医療の問題の陰で私たちが見落としてきた、真剣に取り組み損ねてきた、永遠のいのちに至る食物を分かち合うことへの怠慢、不均衡な状態に対する無感覚への、鋭い痛みを伴う問いかけであった。「みことばの飢饉」状態が冷徹なデータを以て提示された。彼の表情は既に福音に与かっている陣営が担うべき**未伝の人々への責務**を如実に物語っていた。

「まだ一節も訳されていない。その語の翻訳に取り組むと手を上げている人もいない」言語の人々への私たちの責任はどうなっているのか。主のみこころを痛めてきた怠慢な態度の結果がそこにあるように思われた。

地上にある8000の言語（6900がより正確？）のうち旧新約に訳出済みが451。新約だけが1085言語、843には部分訳が完成し、2000前後の言語には現在翻訳作業中であるが、まだ一冊の分冊も完成されていない。そして**2252の言語**には取り組むと表明する手さえ上げられていない、という現実のチャレンジ。

2) 632の UUPG

5万人以上の人口がある **Unengaged Unreached People Group** が**632**もある。しかしその到達への戦略は口伝の伝道方策の開発で一気に Oral Learner(注：文盲)への障壁を低くしている。そして我々の世代のうちでの全部族への到達という2千年の負債を完済する可能性を非常に大きくしている。

3) 課題は具体的な応答

どんなに会議で恵まれても我々が具体的に祈り出さないなら、動き始めないなら、その意義は疑われるしかない。私自身は帰国してなすべき報告は何か。友人同労者達に働きかけていくチャレンジは何かと自問しながらの帰国でした。そしてこの**632**に関わり続けていこうと願わされている。

インパクトのある第三回ローザンヌ宣教会議
—— 三つ・四つのインパクト 金本 悟
日本ローザンヌ委員会 委員長

2010年11月29日

第三回ローザンヌ世界宣教会議（ケープタウン2010；以下「CT2010」）が、2010年10月16日から25日まで、南アフリカのケープタウンで開催されました。参加登録者は3900名、ボランティアの方々は約600名、総勢4500名が集まる国際会議でした。日本からの参加者は35名でした。インパクトのあるCT2010の影響は今後広がって行くことでしょう。

1. 6名テーブルのインパクト

CT2010を象徴するのは、参加者数の3900とか4500ではなく、6という数字です。6名がけのテーブルが約700、国際会議場に並べられていました。その6名がけテーブルで同じ6名の参加者が一週間にわたりエフェソ書の学びを共にしました。全体会議の講演もテーブルごとに聞いて、分かち合いをしました。違う背景を持つ同じ6名の参加者が、自分の視点からの発言をし、互いにフィードバックを行うことにより、生きた分かち合いの時となりました。この分かち合いの 때가、CT2010の中核と位置づけられていました。6名テーブルは、CT2010の影響の根幹となるインパクトを与えています。

2. Missio Dei（神の宣教）のインパクト

ローザンヌ運動は、Whole Gospel（全福音）、Whole World（全世界）、Whole Church（全教会）に仕える宣教運動と位置づけられています。今回のCT2010においても、多様な宣教方策（strategy）が語られました。また、全体会議のプログラムでは、全福音、全世界、全教会についての講演が2日間ずつなされました。

そのような多様な宣教方策とプレゼンテーションに心が引かれました。また、その多様性の中にある一致には特に心引かれるものがありました。「多様性と一致」以上に私にインパクトを与えたものは、「近代宣教パラダイム」での宣教方策と、「ポスト近代宣教パラダイム」による宣教方策の混在を信じる世界が出現していることでした。それぞれがそれぞれの異なる方法で一緒に主に仕えていく中で、Missio Dei（神の宣教）の業にかかわっていくことができる世界が出現しているのです。そして、この混在を許容することが、「ポスト近代宣教パラダイム」の一つの指標となっているのでありましょう。

3. キリスト教世界の地政学的インパクト

CT2010は、エディンバラ宣教会議の100周年を記念して行われた国際会議です。この100年間のキリスト教宣教の結果として、キリスト教が欧米社会だけのものではなく、世界的なものに広がってきたことを私たちは知ることになりました。

今回、CT2010への参加者は、それぞれの国の教会員数を土台として参加者数が割り当てられました。経済力ではまだ欧米キリスト教会が指導力を発揮していますが、地政学的な指導力は欧米と非欧米社会とが共存しないと発揮できなくなっていることを多くの方々が感じられたのではないのでしょうか。

混乱や苦難の時の激しい熱い祈りも、また、瞑想のように静かな祈りも共に主イエスの祈りに通じています。アフリカ、中国、イスラム文化圏、福音が伝えられていない地域など、宣教地がどこであろうとも、宣教に与える地政学的なインパクトの大きさを感ぜずにはられませんでした。

4. 個人的なインパクト

CT2010で受けたインパクトを総合するのは、参加者一人ひとりであり、参加者同士のネットワークであることを実感しています。組織としてではなく運動体としてのローザンヌ運動を生かすのも殺すのも参加者一人ひとりのクリスチャンとしての成長にかかっていることを感じました。私たちがイエス様と共に歩み続けて生長していくことがローザンヌ運動を生かしていくことになるのです。

私は個人的にも、CT2010そのものからのインパクトを強く受けました。CT2010がケープタウンで行われた故に、①喜望峰を訪れ、喜望峰から見た大西洋とインド洋とがぶつかる潮の目をみながら、フランシスコ・ザビエルの宣教に思いを馳せることができました。②アンドリュー・マーレー教会及び研究所を訪問し、「聖書的である」ということの意味と「霊性と教会と政治」の関係性を考える機会が与えられました。③ケープタウン市内にある奴隷博物館を訪問して、アウシュビッツ博物館で感じたのと同じ悪寒におそわれながら人間の罪の深さと恐ろしさに震え、十字架にかかれたイエスを思い浮かべながら黙想することができました。④そして、日本からの参加者の皆さんのローザンヌ運動継続に向けての熱い思いに触れて、新たに二年間の任期で日本ローザンヌ委員会の責任をとることを決意しました。新たに委員や役員に加わってくださる方々が起こされたことも神様に感謝しています。これらのことも含めて、人と人とのつながりや励ましの中で、イエス・キリストの福音が受肉していくことを肌でも心の奥底でも感じました。

今回 CT2010に参加して、個人的には、二日間でケープタウンに行ける21世紀科学文明の恩恵を受けていながらも、二日間機中泊することの不便さを嘆いている自分を観て、なんと自分自身が時代の子なのかと驚愕を覚えました。

そのような視点で日本の教会を見るときに、女性指導者や次世代の指導者が生み出されやすい教会のあり方などについて、日本の教会で一緒に取り組んでいくことの大切さを示されました。

CT2010は終わりました。しかし、これからが参加者一人ひとりにとっての新たな出発です。CT2010の参加者一人ひとりが、異なった宣教方策を用いつつも、主にある家族として共に主に仕え、Missio Dei（神の宣教）の業に励んでいく使命を与えられました。

CT2010のために背後で祈ってくださった多くの方々に改めて感謝を申し上げます。これからの日本ローザンヌ委員会の働きのためにも引き続きお祈りくださいますようお願い申し上げます。

日本における和解の福音の受肉を願って 鎌野直人
関西聖書神学校 舎監

第三回ローザンヌ世界宣教会議に出席し、さまざまな感動と宿題を頂いて帰ってきました。テーブルグループでの交わり、食卓での交わり、日本からの参加者のあいだの交わり、めぐみを数えたら、きりがありません。報告では、日本のきよめ派の教会に属する、ひとりの聖書学者・神学教育者が今回の会議で考えたこと、特に日本の文脈への語りかけという観点から、二つのことを報告させていただきます。

まず、「われらの福音理解をもっと広げる必要性はないのか」という語りかけを聞きました。欧米のリバイバリズムや聖潔運動の影響の中で生み出された宣教師によって生まれたわたしの属する教会には「罪からの救いという福音を出来る限り多くの人に伝える」情熱とその実践という強さがあります。さらに、「内なる人のきよさ」を求める渴望とその強調という特徴もあります。けれども、今回、ケープタウンで世界中のクリスチャンリーダーたちと共にエペソ人への手紙を学ぶ中で、自分たちの福音理解が「狭い」のではないか、という認識を頂きました。会議では、全宇宙の創造者である神の摂理的計画には宇宙大の広がり、神の宣教という宇宙大の広がりがある、この働きにわれわれがそれぞれの地で、たとえそれが小さな歩みにしか見えなかったとしても、積極的に参与することの必要性和責任が語られました。

その一方で、自分たちはどうか、と考えると、失望感に満ちているように思います。狭い国土に住み、たえず少数派を感じ続ける日本の教会には「われらの歩みは小さく、取り立てて何の影響もない。そして、現在、力をさらに失いつつあり、やがて今の年長者世代が死に絶えれば、消えてしまっていく存在である」というような閉塞感が漂っている気がします。だからこそ、「われらは福音、つまり宇宙の創造者である神の宇宙大の計画のよき知らせとその宣教の働きにこの日本の地で加えられている」という確信と使命感を思い起こす必要があることを今回の会議で教えられています。

武力でもたらされていたローマ帝国によるローマの平和という欺瞞のまん中でキリストの平和をパウロが宣教したように、「経済的繁栄による平和」の欺瞞が暴き出され始めている日本で、宇宙大の広がりをもつキリストの福音とそれがもたらす平和を語り、生きるように教会はまねかれています。そして、神の宣教に参与する責任を託されているのです。“Think globally, act locally”（地球大で考えて、その地域で行動せよ）ということばがありますが、キリスト者は、“Think cosmically, act locally”（宇宙大で考え、その地域で行動せよ）なのだと、福音の広がりを知ることを通して感じさせられています。そして、神の宣教という同じビジョンを神から頂き、この宇宙大の福音に生かされ、行動する仲間が世界中にいます。このことを覚えて、この地でなすべきことをさせていただきたいと願っています。

二つ目のことは、ケープタウンのわたしが泊まったホテルの近くのオランダ改革派教会の裏にあるアンドリュー・マーレーの像があることに気づいたことに端を発した、ひとつの考えです。彼の書物の多くが日本語に訳され、わたしの所属する教派の多くの人も彼の書を愛しています。彼は19世紀の南アフリカ・オランダ改革派教会の牧師でしたから、この教会の裏に彼の銅像がおかれるのは当然だろうと思いました。そこで、彼について少し調べ、彼の生涯と南アフリカの歴史を振り返ってみた時、なんと彼の晩年にはアパルトヘイトへの道が着々と敷かれ、最終的にはマーレーが所属していた教会（南アフリカ・オランダ改革派教会）の牧師であったマランが大統領となった1948年、アパルトヘイトが公式の南アフリカの方針となったことがわかりました。マーレーには豊かな霊性があるでしょう。しかし、その霊性を受け継いだはずの教会から人種差別の政策が生み出されたのです。また、マーレー自身もアパルトヘイトへの道に進みつつある国に対して、ほとんどなにも語っていません。霊性とは何か、福音とはなにか、わたしは正直、当惑しました。

マーレーに関わるこのことと、1994年にフツ族による民族粛正が行われたルワンダの牧師が会議の基調講演のひとつで語っていたことが最近になってわたしの中で響き合い始めています。Rutayisire氏によると、民族粛正が行われた時、ルワンダはもうすでにキリスト教国でした。90%の以上の国民がカトリック、プロテスタントなど諸教派に属していました。しかし、キリスト教国であるにもかかわらず、そこで前代未聞といわれるような暴力的な行為が行われたのです。氏は、「福音は語られたが、民族のあいだの争いという社会的な問題は取り上げられなかった。霊性は語っても、それが日々の現実と結びついていなかった。国の必要と問題に応えるような、福音の文脈化が行われていなかった」、だからこのようなことが起こってしまったのだ、と基調講演の中で解説しました。

これらのことを思い浮かべる中で、日本の教会は本当に大丈夫だろうかと、立ち止まらざるを得ませんでした。福音は語られているだろう。豊かな霊性もあるだろう。しかし、これらが個人と社会と国の現実と結びつけられているだろうか、言い換えるならば全人格的なレベルまで深められているだろうか。何か問題が起こった時、われらは福音に則ってその問題に対応できるのだろうか、これまでそのように対応してきただろうか。それとも「日本的」な方法で、福音によってはなんら変革されていない方法で、それに取り組んではいけないだろうか。自分の伝統を見るならば、その霊性は豊かであるかもしれない。しかし、和解の福音がわれらの文化の中に文脈化されておらず、われわれが抱えている問題に光を当てられていなかったならば、何かあった時、南アフリカ・オランダ改革派教会やルワンダの教会と同じあやまちを犯してしまう可能性をもっているのではないか、そのような思いを頂いています。

和解の福音によって、日本の教会も現在と過去を再検討し、和解の福音のメッセージによってこの国の諸問題への主のいやしをいただき、意図的に、繰り返し、全人格的なレベルまで深められた和解の福音のメッセージを語り続ける必要があることを覚えます。Rutayisire氏が最後に語っていたのは、和解のメッセージが人々の心の奥に届き、人々が変えられるまで繰り返し語り続けよ、ということでした。日本における福音の全人的な理解が深まるように働けと、主からの召命をいただいたように感じました。

「信仰によるアクションへ」
(第三回ローザンヌ世界伝道会議に出席して)

倉沢 正則
東京基督教大学学長

ローザンヌ世界伝道会議は今回の南アフリカ・ケープタウン（CT2010）で第三回を数えるが、私にとっては初めての参加である。しかし、1974 年以來のローザンヌ運動は、私の信仰と奉仕の道筋をしっかりと導いているものであると実感している。1970 年に受洗して大学時代を過ごしたが、70 年代における日本の福音主義諸教会の世界宣教への祈りと関心は、恐らく、1966 年のベルリン、その後のローザンヌ運動と軌を一にしているのではないかと思う。これまでのローザンヌで確認されてきたホーリスティックな宣教観や宣教の戦略・パートナーシップなどは、宣教の担い手としての「教会」という理解に影響を与え、その働き人養成の必要を訴えることとなった。その必要に応える一つが、「世界宣教の働き人育成」のための四年制福音主義神学大学である東京基督教大学（TCU）の設立であったように思う。大学時代に世界宣教に関心と重荷が与えられ、宣教学を志し、現在、その TCU に関わっている不思議さを感じるが、ローザンヌとの深い関係を感じざるを得ない。

今回の会議でも、「全教会が全福音を全世界にもたらす」ことが世界伝道であると理解されているが、CT2010 は私にとって、この三つの「全」を少しく「体感する」機会であったと言える。まず「全教会」というところで、今回ほど以前と比べて、その参加者が「あらゆるところ」からケープタウンに集まったことはないのではないだろうか。地域的にも（残念ながら、中国の参加者は出国できなかったが）、教派・教团的にも、地域教会も超教派伝道団体も、信徒も教職も、女性も男性も、年輩から若者・子どももというように、「教会」という用語で括られる「あらゆるもの」が少なからず共在するという体感は、実にすばらしい機会であった。アフリカの地域性の豊かさとともに、全教会が協働した福音の現し方の多様性（単にメッセージだけでなく、ドラマ、ミュージカル、踊り、映像、民族楽器による賛美など）にも今後の伝道の活路を見た思いがした。

第二の「全福音」というところでは、特に、福音におけるイエス・キリストの中心性が明確に提示され、その福音が指し示す事柄が、第三の「全世界」という項目に括られる今日世界の現実に即したかたちで語られた。私はこの視点に福音のリアリティーを感じ、日本伝道へのチャレンジとして受取ってきた。多元的でグローバルな世界にキリストを「真理」としてはっきりと伝えること、分裂し傷つく世界にキリストにある「平和」を構築すること、他宗教の人々にキリストにある「愛」を証しすること、未だキリストを知らない人々への伝道と教会開拓を優先的に行うこと、貪りと不道德と傲慢に満ちる世界に教会が謙遜と誠実と質実をもってキリストを現すこと、アジア・アフリカ・中南米に広がるキリストの教会に、新たな世界大の釣合いの取れた宣教協力がなされること等。一つ一つには「行動（アクション）」が求められる。まさに、信仰に基づく行動への召しが「ケープタウン・コミットメント」として結実した。私にはその決意を新たにする時となった。

蠢く人々の中で神は今も動いておられる 黒田 撰

Japanese Christian Fellowship Network 総主事、OMF 宣教師

God is on the Move. 神がいかなる境界線をも超えて動いておられること、宣教は神ご自身の働きであること、その働きに贖われた私たち一人一人が加えられていること……。今回の世界宣教会議では、まず、人知を遥かに超えた主の大きさと、その神がこの小さき者たちの一挙手一投足に無限大の関心を持たれていることを目の当たりに見、滞在全体の中で様々なことを体験し、会議のあらゆる角度を通して私の心は言葉にならない主への感謝の思いで一杯になりました。それぞれのメッセージはもちろんのこと、壇上から、また、テーブルディスカッションを通して分かち合われた全ての証に神の力の深さ、暖かさ、厳しさ、偉大さを見せつけられました。この神が私の神であること、私がこの神の娘であることへの感謝は賛美として私の中から溢れてきています。

People on the Move. ディアスポラ邦人宣教に携わらせて頂いているので Multiplex と Dialogue の時間をディアスポラに焦点を当てて参加しました。自らの召しと直結しているからこそ強く感じるのだとは思いますが、このディアスポラの働きは日本宣教にとって具体的、象徴的な大きな影響を与えているものだと思います。ディアスポラ宣教は移動する者たちへの宣教です。彼らに関われるのは限られた時間だけで、それは大きな特権です。それと同時に、いずれ彼らが移動して行く先の神の家族とも繋がることの出来る素晴らしい働きです。しかし、それを進めていくためには、働きの焦点はあくまでも神の御国建設であるということを信じ続け、実践して行く必要があります。様々な状況の人々、教会、ミニストリーと自発的、かつ積極的なパートナーシップは重要です。また、人の入れ替わりが激しいディアスポラ宣教では次世代のリーダーを育てることは状況的にも必要不可欠です。そして最も重要なのは、この移動に関わる全ての者達の派遣と配置は、主のご計画の内にあるという何よりも主権を認めることだと思うのです。

ここでは書き切れない程の多くの恵みと素晴らしい体験をした中で幾つか感じた課題があります。これらは個人的に次の世代に分かち合い、応えて行く必要のある課題だと思います。その一つは、グローバル・サウスを含むグローバリゼーションの更なる成長の必要性です。大会のあらゆる側面から各地域の良さを表現する努力が多々見られましたが、やはりアメリカが主導権を持っている現実に課題を感じます。素晴らしい開会と閉会礼拝の雰囲気や、閉会礼拝の聖歌隊に黒人がいなかったのもそう感じた一つです。しかし、正直に申しますと、あらゆる言語、文化や背景を超え、かつ、それらのものがそれぞれ大切に生かされた礼拝の姿そのものが実際どういうものなのかということ分かりません。このビジョンの欠如もまた私の課題の一つです。また、インサイダームーブメントと呼ばれている、特にイスラム圏におけるキリスト者の礼拝スタイルも様々な反響を呼んでいたと聞きます。主の声にそれぞれが聞いて自立した礼拝の姿を違う立場の者たちがどう見、評価し、関わ

るのか。前者の課題と深く結び付きのある重要な課題だと思うのと同時に、こう考えてしまう思想のフレームワークそのものに限界を感じています。

このグローバルな会議に出席して感じた日本の課題で最も危機感を感じたのは、次世代のリーダーの欠如ではなく、そうなってしまっている原因の追及とそれに対する具体的な取り組みの欠如です。次世代のリーダーはいます。そのリーダーとどう出会うのか、どう関係作りをするのか、実際にどう動くのかが私自身取り組みたいと願う課題です。また、彼らの次の世代をどう育てるように促すかも重要な課題だと感じています。もう一つは、若い世代の神学者、宣教学者の必要性です。変化のスピードが増して行く今、聖書を土台にし、日本語、日本文化、今の時代のフレームワークを作っていこうとする人材が必要です。これからの時代の動きはさらに速くなっていきます。そのスピードに翻弄されず、今までの概念にしばられず進んで行くためには、全福音を全教会が生き、全世界に届けることこそが必要だと思います。

今回、世界会議に出席できたことを心から感謝します。

世界の痛みに向き合う福音理解 根田祥一
クリスチャン新聞編集長

ローザンヌ運動の最大の貢献は、世界の教会とキリスト者に Holistic Gospel（包括的福音）という「福音理解」を示したことにある。福音が霊的側面と社会的側面へと二極分化していた 20 世紀中頃までのキリスト教界にあって、もう一度それらを統合する視座を示した 1974 年のローザンヌ誓約は、世界中の教会リーダー、宣教リーダーに多大な影響を与え、その後の宣教の理解や実践を、聖書的なバランスの取れたものへと方向付けてきた。「ケープタウン 2010」は、その Holistic Gospel という福音理解を、さらに具体的に今日的な諸問題に視野を広げつつ深めたと言えよう。

ローザンヌ運動の基本的なスローガンである “Whole Gospel, Whole World, Whole Church” が今回も踏襲されたが、このうち World に関しては、現在のこの世界を “divided and broken world”（分断され損なわれた世界）と位置づけ、世界に住む人々が抱えている貧困や隷属、HIV/AIDS、紛争、差別や迫害、環境などの深刻な諸問題に向き合い、具体的な取り組みに関心を払った。しかしそれは、ただに福音派が社会的責任をも果たすようになったというだけにとどまらない。それらの、分断され損なわれた世界の様々な現状に対して、キリストの愛・キリストの平和に根ざす「和解の福音」（Ⅱコリント 5：18～20＝会議の主題聖句）にこそ答えがあることを明確に打ち出し、またそれがいかなる仕方で「答え」たり得るのかを模索したところに、今会議の特徴があったと思う。

その姿勢は、端的にプログラムに反映していた。毎朝まず神への賛美と礼拝で始まり、エペソ書を読み進み、テーブルグループでその日のみことばが何を語っているのかを分かち合い、その箇所からのメッセージに耳を傾け、さらにテーブルグループで各メンバーが属している国の文脈にみことばから教えられたことをどう適用するのかを話し合う。続く主題講演でも、教えられたことや考えさせられたことをテーブルグループで討議した。そうすることによって個々の社会的な諸課題は、単なる「社会問題」である以上に、聖書の福音との絡みでどう取り扱うのかが問われる「福音の問題」であることが浮き彫りにされた。聖書箇所が教会論を主題とするエペソ書であったこと、その中心テーマが「キリストの平和と和解」であることに、プログラムが周到に用意されたものであることを感じた。

「ケープタウン 2010」は、74 年ローザンヌ会議が蒔いた Holistic Gospel という「福音理解」の種が、36 年の時を経て開花し、その Holistic Gospel を今、私たちが生きている現実の世界の危機的状況に対してどう適用し、壊れてしまった世界を神のもとへと回復するのか、ということが追求された会議だったといえよう。ケープタウンで投げかけられた多様で深刻な課題を、今後、世界のそれぞれのところで教会がどう受け止め、いかに真摯に向き合っていくかが、私たちに委ねられている。「和解の福音」が福音の中核であるという理解、この時代が危機に直面しており、そこに福音をもって届くべき使命があるという認識は、第 4 回から第 5 回の日本伝道会議と「沖縄宣言」「札幌宣言」の問題意識にも通底する。21 世紀も第 2 の 10 年を迎えるこの時期、これからの教会が進むべき道標が据えられたことを感じる。

運動体と組織体の連携を期待して 竿代照夫

——ローザンヌⅢに参加して——

インマヌエル中目黒教会牧師 イムマヌエル綜合伝道団代表

効果的だったテーブルグループ

今年の6月、ある宣教団体の大会でシカゴに寄ったとき、旧友である元ケニア宣教師デビッド&サリー・イヴァスカ兄妹に会った。彼らは10年間、私たちと同じナクル市に住む隣同士であった。私たちは教会建設、彼らはI V F (ケニアではF O C U S)で学生伝道を指導していた。米国帰国後もしばしばアフリカ諸国を訪問しては、学生を指導している。

そのイヴァスカ兄妹がローザンヌⅢのテーブルグループとその教材作りに携わっていることを知り、大変興味を覚えた。シカゴで会った時、「一週間留まるのでなければ、参加する意味がないよ。」と言われたにも拘らず、(日本での大会の都合で)遅刻して参加することとなった。それでも、グループの恵の片鱗に触れることができた。

私のテーブルには、トルコ人、メキシコ人、ドイツ人、オーストラリア人がいて多彩であり、み言の適用という点から言えば、文化背景と、働きの状況、政治状況によって、千差万別であることが新鮮であった。特にトルコ人のU兄が、プロテスタント総人口4千人という圧倒的な少数派でありながら一生懸命に福音を伝え、社会や政府に対して信教の自由の確立のために戦っている姿に感動した。

アフリカでアト・ホーム

今回の大会では特にアフリカが輝いており、その存在感が圧倒的であったと思う。彼らの生き活きた信仰、主を愛する熱い心、宣教への情熱がプログラム全体を通して感じられ、近い将来、世界の宣教運動をリードするという予感を持ったのは私だけではなかったと思う。アフリカから、多くの宣教師たちが派遣される時代が(既に部分的に始まっているが)加速されることを祈っている。

勿論、アフリカには、情熱だけでは乗り越えられない様々な難しい課題が多く横たわっていることも垣間見た。一つは経済問題で、アフリカの諸教会が、今回のようなタイプの会議、それに続く運動を経済的に支えうるかと言うと、大きな疑問がある。経済の規模ではなく、依存的体質は未だ克服されていないように思う。また、私の働いていたケニアからの代表はI V F 繋がりに限られており、もう少し幅広い教会代表であれば良かったと思われる。

いくつかの講演が心に留まったが、一番印象に残ったのは、クリス・ライト氏の「繁栄の福音」への警鐘であり、主イエスの生き方である「謙遜・廉直さ・シンプルさ」の強調であった。特にこの「繁栄の福音」がむき出しに提示され、混乱を招いているアフリカ諸国には、必要なメッセージであったと私は感じた。

組織的な働きとの連携は？

ローザンヌ精神は、「全教会が、全世界に、全人的福音を」というモットーに表れていると思うし、また、ローザンヌとは「運動」であり、組織体ではない、ということが強調されている。そこにローザンヌの強さがあると共に、不安定性を感じてしまうのは私だけだろうか。教会を基盤としているWEAなどの機構と適当な距離をもって繋がり、連携し、上手に棲み分けていく時に、その強さが発揮されるように、私は思う。

昔を遡ると、ローザンヌⅠに基づくウイローバンク・リポートは、宣教とは何かを真剣に考え始めた若いころの私に大きな刺激であり、テキストでもあった。その後「世界の果て」にいて宣教活動に携わっていた時代にはローザンヌの名前も聞こえて来ず、ときどき聞こえてくるのは、教会と離れて個人プレーをしている人々の運動というネガティブなコメントであり、事実そう言われても仕方がない側面があったように思う。ローザンヌⅢはその「弱さ」を克服して行われた（今回の会議は、その最初から、WEAの協力を得て行われた）、その故に大きな盛り上がりがあったと理解しているが、当たっているだろうか。

さて、私はこうした問題を抱きつつ、10月22日のWEA宣教委員会の夕食会、24日のWEA総主事のタニクリフ氏との会談、25日の日本人出席者の会合で、ローザンヌとWEAの関係について質問し、提議した。世界においても、日本においても、この両者がより深く協力し、補完し、宣教の業を進めるよう期待している。

会議三日目の朝：～苦しみ～ 清水 担

「私の受けている苦しみは、そのまま、あなたがたの光栄なのです(エペソ3:13)」

福音交友会派遣・SIM 宣教師

三日目の朝、一人の女性が講壇に立って話し始めた。「八月五日にアフガニスタンで宣教師たちが殺されました。村へ宣教旅行の途中、車を止めて静かな所で昼食を取っている時に突然襲われたのです。理由や目的もまだ分かっていません。」

この日は「苦しみ」に焦点が当てられていた。エペソ書の学びでは、ジョン・パイパー師を通して「苦しみもキリストのためなら、栄光である」(3:13)と語られた。また、北朝鮮出身の少女が中国で信仰を持った父親が宣教のために北朝鮮へ戻った事、その後音信不通である事、主にある希望を涙ながらに証した。心の深い所に響くことばと証をかみしめながら、この北米からの女性の話に耳を傾けた。

彼女は殺された十名の名前を一人ずつ挙げながら、「この人は運転手でした。この人は通訳者でした。歯医者でした・・・」と短く紹介を続けた。宣教者の苦しみを共に覚えるために、最近起こった事件の一つを取り上げてその詳細を話してくださるのだろうかと考えながら聞いていたが、続く彼女の言葉に頭をハンマーで殴られたような気がした。「・・・そして、この人は私の夫でした。」

これは誰かの証の紹介ではなく、二ヶ月前に殉教によって伴侶を失ったキリスト者本人の証言だったのだ。事件の直前に電話で交わした夫との会話のメモや遺留品として捜査員から渡された説教メモを紹介した。凜として、時折笑顔すらも浮かべて話す彼女の姿に圧倒された。説教メモの最後に「チーズの話をする」とあり、夫人は夫から何度も聞いていたであろうその話をしてくれた。「アフガニスタン特有のこのチーズはミルクを入れた皮袋をらくだに吊るして旅をする間に出来ます。ただし匂いが強烈で、慣れるのに時間がかかります。しかし一旦その匂いに慣れると今度はこの匂いが喜びとなるのです。イスラムの人々にとって、キリストはそのようなものなのです。」

タンザニア南部、特にイスラム教徒の多い海沿いの町や村々で宣教にたずさわっている私たちの所にも、時折訪問者が来てくださる。が、彼らを危険な所へ連れて行く事はない。

今回殉教したほとんどが宣教師として第一期目で、中には訪問者たちも含まれていた。数十年の宣教経験のあるこの宣教師はリーダーであった。「この村を訪ねる度に『来年もきっと来てください。あなたがたの他にこの村に来てくれる人は誰もいないのです。』と言われるのです。」訪問者たちを連れて行けるほど比較的安全な所と考えたのではないか。これは決して他人事ではない。

舞台裏にはボランティアとして来ていた若い女性が一人いた。彼女はアフガニスタンへ宣教師としていく思いを抱きながら、家族の反対もあり、一步踏み出せずにいた。今回の証はどれほどの衝撃だった事だろうか。「やっぱり止めておこう」と考えても無理はない。しかし彼女は逆にこの証を通して、主からの召命の確信を得たのである。彼女はボランティアのリーダーに付き添われ、証をした夫人の元へ行き、共に心を合わせて祈った。

そのようにして、主の働きは続く。

キリストのいのちを生きる 末松隆太郎
日本福音キリスト教会連合・栄聖書教会牧師 JEA 宣教委員

2010年10月16日～25日、第3回ローザンヌ世界宣教会議が南アフリカのケープタウンで開催されました。1910年にスコットランドのエジンバラで開催された宣教会議の時は、欧米(白人)が世界宣教の担い手でした。そこでは、20世紀を宣教の世紀としたいという祈りがありました。以来100年を経て、198カ国から参集した4200人の代表と触れ、その肌の色、言語、宣教の方法の多彩さを見、又アフリカ、南アメリカ、アジアでの宣教の進展を聞く時に、世界宣教の拡大を肌で感じました。そして、ヨハネが幻の中で見せられた光景が、現実に関ここにあるという感動が何度も押し寄せてきました。(黙示録7章9-12)

開催国となった南アフリカは、白人支配層のアパルトヘイト(人種隔離政策)を非暴力で克服してきました。抑圧と差別を経験しながら恐怖と憎悪、敵対ではなく、和解と平和を実現した経験を持つ現場です。課題はなお山積してはいますが、和解の中核に「十字架」と、教会のとりなしがあったわけで、それは宣教の実と言えます。2010年という年も、南アフリカという開催地も意味深いものでありました。

会議の基調は、「全教会」が「全世界に」、「全人的(包括的)な福音」を伝えるという命題をどう実現するかと言う事です。以下、会議の断面しかお伝えできませんが、お許し下さい。

午前の集会は講師の「エペソ人への手紙」のメッセージを聞くだけではなく、6名のテーブルメンバーが固定され、それぞれの状況の中で分かち合いを進め、理解を深める事となりました。イスラムの攻撃にさらされている中で、「和解」の担い手になる事の困難さなど生々しい「現場」の声が語られる中でなされる分かち合いは素晴らしいものでした。厳しい現実の中で、福音を生きる事を求める「うめき」を分かち合いました。

「全教会」が一つの体として、情報と使命を共有するだけでなく、それぞれの文脈での宣教の戦いと生み出される神学的試みを発信する事の重要性が確認されました。

「全世界」の中で、「未伝(Unreached)の民」が具体的に示され、又イスラムやヒンズー優勢の状況で宣教が進められている状況、「ポストモダン」の時代に生きる教会が、宗教多元性の誘い＝福音の相対化の危険の中に置かれている現状も報告され、状況に応じて福音が伝えられ、弁証されている事を聞きました。

又「全人的福音」(和解の福音)を、分断され、破壊された世界にもたらすための代償も報告されました。北朝鮮の高官であった父が、嫌疑をかけられ収容所に入れられ、解放された後、家族3人で脱北した18歳の女子が「あかし」しました。中国で、韓国人宣教師を通して福音に出会った家族はクリスチャンとなり、父は母国に福音を伝えるために密入国し、4年前から音信が途絶えているとの事でした。(おそらく処刑された)

8月にアフガニスタンで医療に従事している10名が、拉致された後に殺害され、残された医師の奥様が、御主人が残された血にそまった説教の遺稿「キリストのかおり」を読まれた時にも深い感動が会場を支配しました。十字架に合わされて生きることの厳粛さを、改めて思わされました。

中国から来るはずであった200名の代表は、拘束され誰一人参加する事は出来ませんでした。会議中にも、スーダン北部の教会が焼き討ちされた事、パキスタンの教会がムスリムに占拠された事を知りました。これらの状況を武力で解決するのではなく、緊迫感から解放されるために福音の絶対性を放棄して、宗教多元主義の誘いに乗るのでもない選択は、主の力なしではなしえません。福音を伝える者が十字架に合わされ、破れ目に立つ＝「キリストを生きる」事の重要性を全体が確認しました。

「全人的な福音」（社会的責任）の提示としては、インドの最下級カースト（ダリット）のために仕事を創出し、共に生活する村（共同体）を作り、信仰とともに、労働倫理も身につけていく働きや「人身売買」によって性の奴隷とさせられた女性の救出と更生のための働きなどが紹介されました。サハラ以南の「福音化」されたアフリカでの「全人的福音」を再提示する必要も報告されました。96年のルワンダ紛争は、フツ族とツツ族の抗争でしたが、福音が伝えられても、自己のアイデンティティーが「部族」とあるという世界観を崩せなかった課題が挙げられました。又HIVも同じ地域での最重要課題です。これも結婚した男女が婚姻外に複数の異性の性にかかわる「友人」を持つ事がパンデミックの理由の一つです。福音が伝えられる以前の「性」の習慣の領域に、福音が届いていなかったことも原因です。同時に、そのような状況でも親兄弟をフツ族に殺害されながら「和解の器」として労しているツツ族出身のルタイシレ牧師、HIV感染者のため医療活動や心のケアを宣教の中で取り組んでいる人々の働きと、証しも聞くことが出来ました。

今回はWEA（世界福音同盟）がローザンヌに全面協力する形で開催されたので、JEAから派遣される形で参加する事が出来ました。前回のマニラでの宣教会議で見られた混乱は、全くなく、ローザンヌの原点に戻された会議であったと思います。神のことば（聖書）から聞き、神のことばを生きる。そして主の民が結び付けられる事の重要性を再確認する時となりました。さらに神学的に深めたい方のためには、ローザンヌの神学委員長のクリス・ライトが「The Mission of God」を著しており、明年には日本語版が出版される予定です。又インターネットで「ケープタウン決意表明」や会議の詳細、日本ローザンヌ委員会の働きを調べることができます。

心はうちに燃えていたのではないか 杉本玲子

—ケープタウン 2010 のレポート—
町田クリスチャンセンター 教育主事

CT2010 から帰国して、強く感じたのは「心はうちに燃えていた」ということです。今も燃えています。感謝報告を4点にまとめてみたいと思います。

全教会にふれて

今回は、宣教師、牧師の枠を超えて、神学校教師、超教派団体代表、医療伝道者、メディア関係者、地域開発関係者、教育関係者、ユースリーダー、賛美・ダンス・アート関係者など、様々な分野で主に仕えておられる方々と身近に交流することができて、主の働きの豊かさを実感しました。「ビッグネームによる伝道から、チームワークと一致による伝道を」「女性や若いリーダーとパートナーシップを」など、明確な理念が打ち出され、しかも建前ではなく、若いボランティアの方々が大勢、生き生きと仕えておられ、豊かな経験をお持ちの先生方が一歩下がって、謙遜に仕えておられる姿を拝見して、サーバントリーダーシップに感動を受けました。‘福音派’の枠、人種や国籍、年齢や働きの分野の違いを超えて、世界中の兄弟姉妹と交わることができ、世界中のクリスチャンの心に同じ聖霊様が住んでおられることを実感し、心の震える思いでした。「教団」「タイトル」などを意識的に表面に出さないようにしていたのが印象的でした。

全福音を体験して

毎日のプログラムが、賛美—映像—みことば観察への勧め—個人のみことば観察—観察の分かち合い—ダンス/スキット—メッセージ—適用の分かち合い—応答の祈りのように帰納的聖書研究の方法を用いて進められました。毎日エペソ書が開かれ、基本に忠実にみことばから教えられるプログラムの進め方は、ユースに対するアプローチと同じだったので、最初は驚きましたが、若い参加者や世界中の参加者への配慮が感じられました。ことばだけでなく、強いインパクトのある創造的なメディアや小グループディスカッションが有効に用いられ、21世紀の福音宣教のトレンドを実感しました。テーブルグループの分かち合いは、世界各国の異なった視点から、鋭く本音で語られ、恵みの広さと痛みの深さを体験できました。貧困、世俗化、政府の圧力、差別と格差、迫害などの具体的な課題も出され、社会問題の中で戦っている教会の姿が身近に感じられました。また、悔い改めと祈りへの強烈なアピールがあり、和解の福音を地球規模の現実生活のコンテキストの中で具体的に適用するように、という鋭いチャレンジを受けました。

全世界から全世界への宣教へのチャレンジ

優先順位について指摘され、未伝地域、未翻訳言語のための祈りと献身が要請されました。また、世界宣教への献金が平均収入の2%ほどであるという事実も語られました。さらにシンプルライフの勧め、繁栄の神学を捨てること、謙遜への招き、苦しみから目をそむけないことなどが強調されました。ライフスタイルの改革、国際的なネットワーキング、帰国者や在留異国人への声かけなど、身近にできる海外宣教の働きはいくらでもあると気づかされました。何度も「すぐに応答を」とチャレンジを受け、「すぐには無理!」と思いましたが、21世紀の宣教の特徴は、スピードが半端なく速くなっていることを感じました。

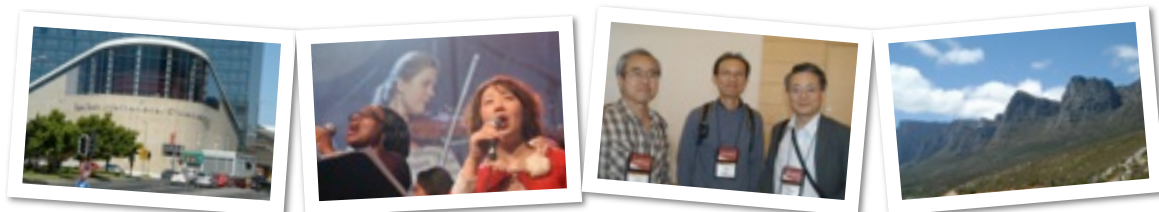
4-14の窓へのチャレンジ

「子どもへのアプローチ」関連の分科会に出席しました。全世界的に救われる人の75-85%が4-14才の間であることから4-14の窓と呼ばれているとチャレンジを受けました。

‘Empowerment of Children’ という提言がなされましたが、「大人が子どもたちに伝道する」のではなく、子どもたちを宣教のパートナーとして考えようという大胆で革命的なパラダイムシフトでした。まさに「全世界から全世界へ」の具体的適用の1つだと思います。また、‘1 for 50’ というビジョンも語られました。「すべての子どもたちに届くために、両親や若いリーダーを養育し、世界中の子ども50人に1人以上のリーダーを育てよう」という戦略です。そのためのネットワーキングがなされ、直ぐに使えるリソースが分かち合われました。

わずか1週間なのに、神学校のコースを修了したくらいの新しい視点と内容をいただき、充分消化できない現状です。日本でも炎が燃え広がり、いつまでも燃え尽きないように(出3:2)と祈ります。

An Unforgettable Experience ポール鈴木
セント国際宣教団 hi-b.a.派遣宣教師



Cape Town 2010

Some of my favorite quotes were from Os Guinness and David Wells regarding Globalization:

Beyond any question, the single, strongest expression of the face of the world in our time—the advanced modern world of the early twenty-first century—is globalization, the process by which human interconnectedness has expanded to a truly global level.

The crucial and supreme point of the whole discussion is that globalization has a special relevance for Christians because the Christian faith is an essentially global faith.

In sum, while the global world offers unprecedented opportunities for reaching peoples and parts of the world that have never been reached before, it sharpens the contrast between the wisdom of the world and the foolishness of the Gospel to a daunting and uncomfortable degree. Evangelism in the global era appears easier, and in many ways it truly is, but discipleship is unquestionably harder, and so too is costly incarnational evangelism that is patterned on the life and death of Jesus rather on the brilliance of modern insights and techniques.



Japan Delegates

Interacting with members of the Japan delegation ended up being a real highlight because it exposed me to a side of Japanese pastors/leaders I had not seen before. These guys were hilarious! They could joke around in English with other congress delegates like at our regional gatherings, and were non-stop at the Japan dinner on Thursday night. There were opportunities to connect on a one-on-one basis as well (thanks

Mike!), and I just came away with a much deeper understanding and appreciation for the men and women who made up the Japan delegation.

Table Mates

People have been asking me for comments about the congress, and in addition to outlining the daily themes, at first I was using the usual words like "diversity" and "multi-cultural interactions" but quickly realized how vague and powerless those words were in trying to describe my experience. Now I talk about the people at my table with names like Paul Borthwick (US), Ishaya Baba (Nigeria), Clive Parnell (Scotland), Rita Christi (India), and Nkosinathi Sixabayi (South Africa) to describe the fullness and richness of the interactions that took place. These people gave challenging and meaningful context to the issues that were addressed at each of the sessions, and were the sparkling treasure that I took home from the congress.



-Paul Suzuki

ローザンヌ世界伝道会議のレポートその1 高奈美香

(これは、毎月出していますミニストリー・レターの2010年11月号です。レポートの続きは12月号に載せました。)

帰国してからと言うもの、facebookには世界各国からの友達リクエストが沢山届くようになりました。無事に着くかしら？治安は大丈夫かしら？人間関係は上手くいくかしら？・・・と様々な不安の中で日本を離れたのがまるで嘘のようです。

《日本語で賛美》

当初、「日本語での賛美はありません」と言われていたのですが、状況が変わり、毎回日本語で賛美をする機会が与えられました。今回の会議では、日本人参加者のグループメールもあり、「今日はこの曲を歌いますので一緒に歌って下さい。」とお伝えでき、日本人からの熱い応援の中で奉仕ができました。日本語をローマ字にしてスクリーンに出したのですが、歌をリードしていた時に気がついた事は、他のどの言語よりも日本語は歌いやすいという事でした。沢山の方々が一緒に歌って下さっていたので本当にびっくりしました。この事実を知って、日本人が作った賛美曲が世界で歌われる日が来るのは夢ではないかも？と益々確信を持ちました。

《着物は日本の美しい文化》

「民族衣装を持ってきて下さい。」というメールを貰ったのは、出発する直前でした。「着物ね〜。ひとりで着られないし、どうしよう？」と散々迷ったあげく、着付けの本のコピーと一緒に浴衣を持っていく事にしました。その浴衣のお陰で、巨大スクリーンに何回も私のアップが写され、沢山の方々から声をかけられ、写真を撮られ、ビデオで収録され、まるでミニセレブ状態でした。着物は他の民族衣装に比べると色もデザインも派手ではないのですが、日本の美しい文化をそのまま現しているようですね。頑張って持って行って本当に良かったです。

《小さな地球》

皆様から顔を覚えられたお陰で、沢山の国の方々と出会う事ができました。国の名前を言われても「それってどこだっけ？」と知らない場所もありましたが、世界各国から5千人の人が集まったあの会場は、私にとってさながら小さな地球のようでした。そして、色んな国の人たちと出会う事をとても楽しんでいる自分にも驚きました。

《新しい世界》

今回の旅で、日本ではあまり触れる機会の無かった3つの問題に神様は目を開かせて下さったような気がします。それは1)HIV 2)イスラム圏における厳しい迫害 3)貧困という問題です。ワーシップチームのメンバーの中に、そのような状況の中で生きている人たちがいたからです。日本が平和である事は大変感謝な事ですが、平和ボケしている自分に気がついたような気がします。日本人には困っている多くの人たちを助ける心も力もある事を、日本に帰って感じています。経済危機にあっても、やはり日本は色んな面で豊かな国です。「この豊かな日本にいて、遠く離れた彼女らに何ができるでしょう？」と彼らとの出会いを通して考えるようになりました。神様がどのようにこの新しい世界に私を導いて下さるのかを、楽しみにしています。

ケープタウン 2010 から受けた宣教的示唆 高見澤栄子

トーチトリニティ神学大学院

＜福音派の包括的宣教の役割＞

1910年、エジンバラで「福音宣教は世界の教会が担うべきものである」という認識がなされた。その後、社会福音に主眼をおいて進んだエジンバラの流れと袂を分けて、1974年に福音派による世界宣教会議が1974年のローザンヌでもたれたが、これは「キリストの贖罪を宣教の主眼におく福音派」というアイデンティティの確立を追求してのものだった。しかし福音派が社会派と明確に距離をとることは、同時に、「福音とは何か」「福音派はどうあるべきか」と自己吟味する場ともなったと思う。福音派内の論争の中で、宣教の社会責任を第一回ローザンヌの時に全面から訴えたルネ・パディア氏とサムエル・エスコバル氏は当時相当な批判にさらされた。しかし、今回ケープタウンの集会では、ふたりが全体集会のステージに立ったのだ。それぞれにローザンヌの歩みを振り返りながら、福音派がここまでできたことを静かに喜び、将来に更なる期待をするトークだった。彼らこそ身を挺して神の国と福音の意義をあきらかにし、福音派の流れを変えた二人である。会場からわき起こった拍手喝采は、神の国の正義を渴望する人々の感謝の拍手だったのだとおもう。日本・韓国という富裕な国にあつて、搾取と貧困にくるしむ兄弟姉妹に何をどれだけしてきたか、問われるひと時でもあった。

＜テーブルグループの恵み＞

会場にみごとに並べられた700近いテーブルは、4000人の大会でありながら、一人一人を説教者にさせる意義深い方法だった。まず、1)ステージからエペソ書の背景の説明をきき、2)それを受けて個々に瞑想し、3)その後神からの語りかけを分かち合う。その時700のテーブルそれぞれが講壇となり、知識としての説教でなく、人生の中で体験されたみことばの力が熱く語られる。みことばのすばらしさと、神の国への希望を深く味わうことができる恵みの時だ。そして、4)再びステージで選ばれたメッセンジャーから勧めがなされ、みことばがさらに深められて、5)応答のいのりへと続く。こうして分かち合われた「みことば」は知的満足では終わらない。一人一人が「みことば」をどう生きたらいいのか、という決断を自然に迫られた。この体験を通して、伝統的な教会にみられる日曜礼拝で「説教者が講壇から一方的に語る」という方式は果たして聖書的なのか、また、3年間の神学校教育をおえるだけで教職者というタイトルを得、講壇を独壇場とする礼拝の形式が、本当に信徒一人一人をみことばで養うという役目を果たしているのか考えさせられた。

＜4つのWhole＞

ローザンヌのスローガン、“Whole Gospel, Whole Church, Whole World”は大会のプログラム構成の中によく反映されていた。一日ごとの焦点:1)多元主義のはびこる世界における「真理」、2)崩れた世界への「和解」、3)「他の宗教」への証し、4)教会の召命を再確認する「優先事項」、5)教会を脅かす内的腐敗への警告と示唆「インテグリティ」、6)世界の教会の協力を訴える「パートナーシップ」は、今世界のクリスチャンが直面している問題を明らかにし、全クリスチャンが重荷を負い合い、共に福音を地の果てまでとどける使命を再確認するように組まれていた。ステージに立つものも、人種や性、また社会階級の差別を減らす配慮がある程度見られ、Whole Churchを実現しようとする姿勢があった(日本人の代表が賛美奉仕者以外いなかったのは残念だが)。また、アフリカのカラフルな民族衣装を着たコワイヤが、アフリカのリズムをアレンジしたシンフォニーと合唱するフィナーレは、南北の文化の見事なフュージョンだった。大会中も各集会毎に目を奪うカラフルなステージ背景と、また舞踊やスキットをもちいたメッセージの伏線の提示は(多少やり過ぎの感は否めない所もあったが)、私たちに肉体、声やリズム、色彩などを与えてくださった創造主への礼拝は、「人間に与えられた全ての機能をもって全人的に献げるとこんなに感動のあるものになる」と、その可能性をもう一度思い返させてくれた。第4回のローザンヌがもたれる頃はさらにポスト近代の個人主義が深まって、4つめのスローガン Whole Person (又は Whole Creation) というのが加わるのではないかと思う。

聖徒の交わりから何かが起きる 立石充子

ウェスレアン・ホーリネス教団 玉川キリスト中央教会会員

ボランティアとして参加したため、20 日夜の全体集会は、私が落ち着いて出席することができた数少ない集会だった。そこでティム・ケラー師が、次のような趣旨のことを語られた。「(都市の) 教会は、つねに秩序の欠落と変化とに対して、心を開いていなければならない。」私がこの1年ぐらいの間考えてきたことに、明確な表現と裏付けを与えられたような気がした。そして、都市の教会だけでなく、すべての教会とクリスチャンは **disorder** と **changes** に対してオープンである必要があるのではないかと思った。キリストの福音は人を根本から造り変える力がある。聖霊の働きは、人の想像力をはるかに超えて力強く、ダイナミックである。人の考えで、神の業のスケールの大きさとスピードを制限しないように、日々神のみ声を聞きながら歩もうと決意した。

世界各国から集まった約 300 名のボランティアのうち、日本からの参加は私 1 人。他に大木孝裕さんという日本人がいたが、彼はアメリカからの参加。ボランティアの最大数を占めたのは地元の南アフリカではなく、意外にもアメリカだった。私のルームメイトとなったクリスティーナも、20 代後半のアメリカ人。彼女は教会で青年担当リーダーとして働きながら、ニューヨークのニャック・アライアンス神学校に学んでいる。この神学校のある教授が、自身は代表者として会議出席する一方、学生たちに「ボランティアとして参加してみないか」と招いたのだという。クリスティーナその他、数名の学生が応答し、ケープタウンにやってきた。この他、いずれもアメリカのゴードン-コンウェル神学校やホーイトン・カレッジからも、教授の呼びかけに応じて数名から数十名の学生がボランティアで参加していた。当然、彼らはほとんど 20 代である。

ボランティアの航空券代は自己負担。現地での約 2 週間の滞在費・交通費・食費・研修費・制服代も自己負担で、締めて 1,275 ドル。宿泊は格安の宿だとはいえ、充実した研修の費用の大半は会議の予算から支出されていると思われた。ボランティア参加費用を満たすために、教会や学校などで献金を募った学生たちは、帰国後、献金者に活動報告をすることになる。20 代のボランティアたちがケープタウンで人生最大とも言える経験を積むのを見ながら、私は日本人の若いボランティアを誘わなかったことを悔やんだ。英語で仕事ができることがボランティアの条件だったとはいえ、よくよく考えれば誘える人は何人かいた。次世代育成をするべき年齢になっているながら、自分がボランティアに選ばれますようにと祈るだけで精一杯だった。

反省を込めて、これから若い世代の教会間交流の手助けをしたいと願うようになった。ケープタウンで確信したことは、交流は楽しい、特にクリスチャンの交流は人を元気づける、ということだ。この楽しさは交流を経験した人でないとわからない。ならば、昔若かった世代の教会間交流もお手伝いしたい。世代間交流も意味があるかもしれない。妄想ふくらむ日々である。

Face to Face とまりひこふみ 渡真利彦文

沖縄バプテスト連盟 胡屋バプテスト教会

諸事情により遅れて二日目の午後から参加となりました。着いてまもなくロビーで神学校卒業以来23年ぶりにコロンビアの友人に会いました。思いがけない再会でしたが、南米で活躍している様子を聞き励まされました。幸先のよいスタートに期待感が増してきました。その後、午後の大分科会へ駆け込み宣教会議の熱い息吹の中に導かれました。

今回の会議を通して印象深かった3つのことを分かち合いたと思います。

一つ目は、テーブル会議であったことです。198カ国から4千人を超える参加者の中でどのように会議が進められるのか興味津々でした。大会議場に入ると参加者それぞれに指定された6人掛けのテーブルが用意されていました。私たちのテーブルには、中国、シンガポール、インド、ジャマイカ、アメリカ合衆国、日本の6人でした。リーダーに選ばれた中国の方は事情があり出席できないことが伝えられました。それぞれ神学校校長、障害者への伝道者、大衆伝道者、牧会者など個性豊かな仲間となりました。朝と夜のセッションで共にテーブルを囲み、共にみ言葉を分かち合い、メッセージや報告にお互いに意見を交わし、祈りあいました。1週間経つと別れがたく、互いに今後も連絡を取り合うことを確認し別れたものです。私は「大きくなることは小さくなることだ」と大切にしていますが、今回の会議の恵みはまさに大きな会議でありながら、それぞれ個々のテーブルが大切にされ活気に満ちたことでした。Face to face これがコミュニケーションの始まりであり、宣教の始まりであることを確認しました。

二つ目は、会議全体を通して世界の変化を確認し、都市伝道の重要性を考えさせられたことでした。教会の宣教が都市化の動きに後れを取っていることが語られ、日本、沖縄の土壌の中で失敗を恐れず、変化を前向きに受け入れ、み言葉に堅く立ち、伝道の突破口を開いていくことが示されチャレンジとなりました。

三つ目は、世界が様々な意味で「ディアスポラ（離散）」化の様相が現代社会の特徴であることです。クリスチャンもノンクリスチャンも社会全体が良くても悪くてもその現象の中にあることをどう聖書的に確認し、宣教の拡大化に創意工夫を持って取り組んでいくかということを考え、いろんな可能性を学ぶこ

とができたことでした。

その他にも祈りのこと、具体的な宣教地のこと、エペソの手紙からの講解説教など多くの恵みがありました。

全てのプログラムを終え、会場を去ろうとすると、一人の紳士が後方から声をかけてきました。向き合くと、なんと神学校で学んだ韓国の友人だったので。なんと今は、南アフリカ・ケープタウンで宣教師として仕えていると話してくれました。凝縮したお互いの様子を分かち合いましたが、まさに神の不思議の導き、再会の喜びを新たに確認したものです。「世界はわが教区だ」と有名な言葉がありますが、まさしく主の宣教が世界を駆け巡っていることを実感し、大きな世界観の中でローザンヌ宣教会議を体験したものです。今後、さらに人材が起こされて、多種多様な個性豊かな主の器が日本からも多く起こされることをお祈りし、協力していきたいと願っています。

第三回ローザンヌ世界宣教会議レポート

「純粋な音を奏でる歩み」 永井敏夫

J. Clay Mission Network

◇ テーブルメンバー

Pさん（男性） ケニアで孤児院のマネージャー、アングリカンチャーチのスタッフ。2年前に火事で奥さんと子供を失う中で主の深い取り扱いを受ける。笑顔と白い歯が印象的だった。

Xさん（男性） ノルウェーのオスロで中国人教会の牧師。教会内の様々な意見の中での牧会。地域教会との連携が進んでいる話に励まされた。

Rさん（女性） インドで聖書翻訳宣教。地域の悪しき霊の働きとマオイストの圧力の中で宣教。宣教師の話を聞いてくれる人の存在が大切であることを改めて思った。

Jさん（男性） 韓国で牧師。北朝鮮の為に祈りながら伝道。問題が起こった時にとにかく祈り、黙して主の時を待つという姿勢に励まされた。

☆ メッセージから、テーブルトークから教えられたこと

＊ 福音のミステリー：福音の完全さ、深さへの驚きと畏敬の念を忘れないで生きていく。偉大で超自然的、そして測り知れない神様の愛の広さ、長さ、高さ、深さを少しでも知りたい、そしてその愛に浸りたいという心を持って生きていくことへの迫りがあった。

＊ イエスキリストの心：神の恵みは、人々から離れた地域（孤独、貧困、絶望、病気など）にいる小さな人々の心の中にあふれている。イエスキリストの眼差しは今どこにあり、何を見ているだろうか？教会が存在していない場所（神様の愛が届けられていない所）に神様は私たちを招いておられるのではないだろうか？人が目を向けない地域の人々を主は見えておられる。また、私たちの心が砕かれていくところから、人と私たちを隔てている壁が壊されていくことを教えられた。

＊ 最大の障害：福音宣教の妨がりの最大の障害は私たちの中にある。それらは、力とプライド、繁栄と成功、富と偉大さであると、クリス・ライト師が語った。HIS: H for humility, I for integrity, S for simplicity を心に刻んで歩いていきたいと思う。また、物がある、物がないということへの思いが、心の中で神様に向き合う時の壁となっていることを教えられた。物の豊かさではなく、福音の豊かさの中に生き続ける中に、真の悔い改め、誠の救いがあり、永遠のいのち

の素晴らしさを味わい、そして福音を伝える純粋な動機から外れない生き方を志向していくことの大切さを示された。

* 互いの関係：Not religion but relationship という言葉が印象に残った。人と関わる時、神様も私たちと一緒にその人に関わり、その交わりの中心にいてくださる。教会はピアノであり、キリスト者一人一人は鍵盤の一つ一つで、互いにつながって、メロディーを奏で、曲を作りあげていくというたとえも心に新鮮だった。

* 新しい決意：ビリーグラハム師の手紙に、「福音は変わっていない、キリストの命令も変わっていない。キリストのために生きる新しい commitment、主と共に日々へりくだり歩む新たな determination を。」とあり、変わらない福音に生かされ、福音を伝えていく新たな決意を迫られた。

* 心に残った賛美 “Jesus is on the move”： God is not dead. Jesus is alive. He is living in me. He changed my life. You are my all. You are the best. You are my joy. You are my righteousness.

栄光を主に。

第3回ローザンヌ世界宣教会議 ケープタウン 2010 レポート
「6人から世界へ広がるパートナーシップ」 永井信義
東北中央教会／拡大宣教学院

さまざまな期待（そして、現地の治安などに関わる少しの不安）とともに南アフリカ、ケープタウンで開催された第3回ローザンヌ世界宣教会議へ出かけた。マニラでの第2回会議の様子を少しではあったが聞いていたので、どんな参加者が出席するのか、どのように進められるのかなど想像しながら日本を発ったが、それらの期待と想像をはるかに超える多くの恵みが用意されていたことを感謝したい。それらの恵みの中から以下の点を報告する。

1. テーブルでの分かち合い、ディスカッション、そして、交わりから得たこと

主調講演や分科会に出て、出席者の何人かが質問したり、意見を言ったりと、これまでに参加した宣教会議や大会をイメージしていたが、今回の会議では参加者は各テーブル6人からなるグループで午前中のプログラムを過ごした。私が属したテーブルのメンバーは、カリフォルニアの日系教会で奉仕する、シンガポール生まれの女性教職者（米国からの参加、テーブル・リーダー）、シンガポールから牧師、ナイジェリアから教団事務局スタッフと牧師の二人、インドから EHC 主事という構成であった。

この5人と礼拝、エペソ人への手紙からの学び、基調講演の時を過ごしたが、神がそれぞれに示しておられることだけでなく、遣わされている宣教地の状況やこれまでの体験、抱えている課題などが分かち合われることによって、新たな視点や考え方と出会うことができた。また、自分が「キリストのからだ」というグローバルなコミュニティに属していることを、4000を超える人が参加する会議全体からだけでなく、各テーブルという小さなスケールでも実感することができたことは今後の歩みの力になることは間違いない。

2. パートナースhipへのチャレンジ

選択に苦勞するほどの数多くの分科会が用意され、参加したそれぞれの分科会で教えられ、考えさせられ、勇気づけられ、励まされた。一般公開されている映画を使った宣教への取り組みについて知ることができたし、グローバリゼーションの抱える問題点を整理することができたことなど、豊富な情報とさまざまな示唆が提供されたことを感謝したい。

しかし、心に特に響き続けたことは「パートナーシップへのチャレンジ」である。今回の会議では「全教会が全福音を全世界へ」というテーマが重奏低音のようにすべてのプログラムにおいて流れていたが、世代や性別、教団や教派、国や地域を超えて、パートナーシップを強化させていくことが、「全福音を全世界へ」もたらすために不可欠であることを痛感する機会となった。そして、「全教会」というパートナーシップのあり方を模索するだけでなく、具体的な行動へと押し出されたことを心から感謝したい。

「継承、そして変革」―第3回ローザンヌ世界宣教会議にて― 中台孝雄
日本長老教会・西船橋キリスト教会牧師
hi-b.a.(高校生聖書伝道協会)代表役員

宿泊したホテルが英国聖公会の聖ジョージ教会のすぐ近くだったため、会議の初日(17日)と最終日(24日)の朝、その教会の日曜礼拝に出席しました。

17日は、午前8時から小礼拝室で行われた礼拝と、10時から大礼拝堂で行われた礼拝の2回。24日は小礼拝室で午前7時から行われた礼拝。

どの礼拝でも聖餐式が行われましたので、合計3回、この教会での聖餐式にあずかりました。聖公会の伝統なのか、ヨーロッパの教会(に影響された南アフリカの教会)に共通した伝統なのか、視覚に訴える要素、司式者の所作、交読や祈りの際の会衆とのやり取り等々、少しだけの戸惑いと共に新鮮さや感動がありました。

結果的にこの教会での(あるいは「南アフリカの教会での」と言うべきでしょうか)日曜礼拝を経験していたことが益しました。ローザンヌ宣教会議の最終日の夜に行われた聖餐式を伴う閉会礼拝の組み立て方、進行の仕方が、朝に経験した日曜礼拝のそれらとまったく同じだったからです。会衆は数千人規模になりますし、オーケストラやダンスを用い、視覚的な要素も多用した、多少やり過ぎ感もある(特に聖餐の二品の登場の仕方)派手なクロージング・セレモニーでしたが、使徒信条に代えてニケア信条を告白することやとりなしの祈りにおける司式者と会衆のやり取り、平和のあいさつ、聖餐のあずかり方等々、規模こそ違い、朝の教会での礼拝とまったく同じ形の礼拝でした。地域の教会での日曜礼拝に出ていなければ、この共通性には気づかないまま、興味深い経験ということで終えてしまったことでしょう。

キリスト教会が2000年積み重ねてきた正統的な歴史を大切にしつつ、現代の課題や要素を世界レベル、地域レベルで盛り込む、という今回のプログラム構成は、4000人を6人ずつのテーブルに着かせて著名な者も無名な者も等しく聖書研究や分かち合いに取り組まさせるという手法を大胆に取り入れたことを含め、準備を重ねてきた方々の決意や努力がうかがえるものでした。綿密な準備や相互の打ち合わせがなければ、あれほど劇やダンス、映像、短めの講演や証し、互いの分かち合いを連動させることはできなかったことでしょう。

1989年のマニラ会議は、2000年という大きな区切りを目前にして多少熱っぽい過激性が見受けられ、拒否反応を起こす者たちもいましたが、今回は、毎晩、祝祷と頌栄をもって静かに閉じるという形式にも見られるように、マイルドな形で歴史性と現代性を融合させていました。プログラムのどこかに拒否反応を覚えた、という人はそんなにはいないのではないのでしょうか。

前回から21年ぶりに開催される今回の会議は、私見では、正統的なキリスト教信仰の確認はもちろんのこと、リーダーシップの継承、台頭するアジア・アフリカの教会とその課題(特に飢餓や貧困や病気)への理解、同時多発テロ以降世界的に強まっている一神教信仰に対する拒絶反応への対応、キリスト教会内部の諸問題の把握と解決への努力(真摯な悔い改めを含め)、といったことが大きな課題であったように感じました。

印象的だったのは、ローザンヌ運動の生みの親である伝道者ビリー・グラハムや神学者ジョン・ストットのこれまでの歩みが「指導者たちのことを・・・見て、その信仰にならないさい」として映像で紹介され、これらの指導者たちに対する敬愛の思いを皆で確認しつつ、「これから一人のスーパースターの時代ではない。皆がパートナーとして協力し合う時代だ」と語られたことです。実際、会議全体を代表するような人物がいたわけではなく、皆がそれぞれ賜物に応じて与えられた場で責任を果たすことをもって、パートナーシップの実践に会議全体として取り組んでいたように感じられました。世界大のネットワークとパートナーシップを皆で構築する、という強い意志が会議全体にありました。

あるいは、(誰しもが強く印象つけられたようですが)「繁栄の福音」に対する真摯な反省として「私たちは神の民として、謙遜・誠実・簡素であろう」と語られたことも深く心に刻み込まれました。

前回は「宣教の効果的な方策」がもっと前面に出ていたように思います。時は流れ、今回は、キリスト教教理の面において宗教多元主義に妥協するわけではありませんし、「全教会が福音の全体を全世界に」という全体テーマが後退したわけでもありませんが、信仰者が真摯に生き、働き、まことの神・まことの救いを知っている者としての誠実な証しを立てることこそが、憎しみや混乱、諸問題の中にある世界に対して福音を届ける最良の道である、と再確認されたように思います。この部分が、私の個人的な琴線に触れて、ことさらに印象に残ったのかもしれませんが。

天安門事件の直後に行われた前回の会議に続き、今回も中国からの参加が困難であったことは、私たちに、祈らなければならない事実、取り組まなければならない課題がなおあることを諭すために与えられた「とげ」のように感じました。

最後に、日本のキリスト教会は、世界のキリスト教会に仕えていくために、長期的視野に立ち、正しい戦略的計画性を持って、若い世代の指導者を育て、こうした場に積極的に送り出さなければならない、と痛感したことも加えておきます。

「全教会が全福音を全世界へ」をテーブルで 西岡義行
東京聖書学院

第三回ローザンヌ世界宣教会議は、エジンバラ世界宣教会議から百年目にあたる2010年にケープタウンで開催された。船で世界へと繰り出した時代、ケープタウンは世界の南、そして東へと移動する象徴的な交差点である。「いにしへの宣教師たちは、福音を携えてあの南の突端の先を通して、東へ東へと向かったのだ。そしてその先にアジア、日本があったのだ」。近くのテーブルマウンテンからはるかに望む喜望峰を目の当たりにした時の感動は忘れられない。しかし、それは始まりに過ぎなかった。

◇テーブルを囲む世界的ローカル

ローザンヌ世界宣教会議の一日は、賛美とテーブルを囲んだ小グループでのみ言葉の分かち合いで始まる。私が属していたテーブルでは、打ち合わせに出て準備してきたリーダーがいなかったこともあり、誰がリードをとるのかと、顔を見合わせるなど、ぎこちなさが漂っていた。しかし、分かち合い、お互いを知るようになると、自らの課題を出し合い、それぞれの国や大陸を代表する一人ひとりが次第に近くに感じられるようになる。喜びの証しや祈りの課題が、自らの喜びや祈りへと変わっていく。お互いが異なる歴史や文化を背景にもち、全く違う現実になされているのに、同じ人間であり、同じ主を信じ、その方に仕えているのだ。その一体感の中心に誰がおられるかは、誰も疑わない。その感動は、いつかどこかでそのひとりと再会するなら、瞬時によみがえり、色あせることもないだろう。

これは、単なる一時的実験でも、演技や練習でもない。むしろこの会議を初めから企画してきたローザンヌ会議のリーダーたちの願いであり、宣教の最前線でなされている働きの現場から導き出された一つのあり方でもあった。宣教は、専門的な神学的議論が煮詰まった先に生まれることでも、ある実力のある国や教団、あるいは代表的な宣教団体が推し進めていく、世界的規模になったある集団のプロジェクトでもない。それは、主の業である。主の宣教に召されているもの同士が、立場や経験、人種や文化、性別や国籍など一切の違いを受け止めつつ、違いを歓迎しつつ一つであることを確認することで、その一つの只中におられる宣教の主を崇めることから始まる主の働きなのだ。

テーブルでは、共にみ言葉の前に静まり、そこにおられる主に聴き、何を聴いたか、お互いから聴く。違った理解の中で同じ主を味わう。そして、証を語り合うなかで、主から委ねられた尊い使命(ミッション)が何かを共に確かめ、同時に自らの失敗や課題を飾ることなく出し合うことで、お互いがいかに逸脱しやすいかを知り、謙虚に聖書の光の前に座る。この一連の出来事は、実は神学委員会におけるワーキンググループでもなされていた。そこでは、名前と顔が分かるローカルな語り合いこそ、世界をつなぐ架け橋なのだ、と言う暗黙の確信が共有されていた。

◇「全教会が全福音を全世界へ」を味わう

第三回ローザンヌ会議の根底にある基本的確信は、「全教会が全福音を全世界へ」という言葉に表現されている。これは、1974年に出されたローザンヌ誓約の、第6項「教会と伝道」に登場する。必ずしも目立っていないこの表現は、1989年に第二回会議で出されたマニラ宣言の骨子となり、三つの「全」(whole)がクローズアップされることとなる。そこから、具体的な宣教の働きに向かう三百にも及ぶ新たな戦略的パートナーシップが誕生し、全教会が協力して全世界を網羅するとする、新たな世紀に向けての世界規模のヴィジョンが描かれていった。その後、ローザンヌ運動は、貴重な財産として発表された「神学的議論」と世界の現実に関能的に取り組もうとする「戦略的実践」との間に微妙な距離が生まれ、運動自体に失速したかに見えた。しかし、くすぶっていた火はもう一度燃え始めた。それが、ケープタウンである。

さて、第三回の会議で発表された「ケープタウン^{コミットメント}決意表明」に目を向けると、その全体をその内側から支えているのが、この「全教会が全福音を全世界へ」であることに気付く。注目すべきことは、その三つを包括的に捉える枠組みとして選ばれた鍵の言葉が「愛」であるということだ。和解をもたらした神の契約の愛への人間の応答は、神の宣教への参与・献身(コミットメント)として表出される。神の愛も、私たちの応答としての愛も、決して抽象的なものではない。それは、実に具体的で、全人的で、きわめてローカルなものであると同時に、文化、人種、大陸や経済格差などを超える力がある。この両者を包括するからこそ、この契約の愛は、「全教会が全福音を全世界へ」にある三つの「全」を結び合わせることが可能なのだろう。その愛の内実は、さながら食物を栄養素に分析するように、神学的に分析することも可能である。しかし、この会議では、栄養素の学びではなく、実際にテーブルで味わったのだ。痛みも喜びも、叫びも感謝も、苦悩も解放も全人的に味わうこのテーブルは、あの出エジプトの過ぎ越しのテーブル、そして主の晩餐のテーブル以来、福音によって変えられた神の民全てによってずっと続けられてきた。そして、これからも世界のどこでも、続けられるであろう。そうなることを待っているのが、このテーブルなのかもしれない。

ローザンヌから日本へ、日本からローザンヌへ 錦織 寛
日本ホーリネス教団東京中央教会

日本からの代表団のひとりに加えていただいて、ローザンヌ会議に出席させていただいて本当に感謝でした。以下に今回学ばせていただいたいくつかの点を上げさせていただきます。

I ローザンヌから日本へ

今回の会議に日本から参加させていただきながら多くの刺激と示唆、またチャレンジを与えられました。

1 グローバル・サウスの成長

いわゆるラテンアメリカ、アフリカ、アジアなどにある教会が非常にめざましい成長を遂げ、自信をつけています。包括的な福音の実践という意味でも、また神学教育という意味でも、めざましい成長をしています。今後、日本の教会もいわゆる欧米から学ぶと言うだけでなく、これらの南の国々からも多くのことを学ばせていただくことになるでしょう。

2 女性指導者の増加

今回の会議の中でも多くの女性たちが、説教・主題講演・セミナー講師などを務めました。そして、とても素晴らしいご用をしてくださっています。もちろん、それぞれの賜物がありますので、一律に論じるべきではないでしょうけれど、日本の教団や聖書学院、各個教会などでますます多くの女性たちがリーダーシップを取ることができるように、様々な条件整備や意識改革が必要であると感じさせられました。

3 イスラム教徒への伝道

今回の会議の中でもとても大きな議題の一つは、イスラム圏の国々への伝道と言うことでした。北アフリカや中東など、イスラム教の強い国々でも、根気強い伝道がなされています。ただ同時に、イスラム教の方でも、キリスト教圏への浸透が図られています。特に韓国などは非常に大きな危機感を覚えています。今後ますます、イスラム教への理解とイスラム圏伝道に対する地球規模の教会協力が必要になってくるでしょう。

4 包括的福音

環境保護、貧困対策、紛争地への援助など、様々な分野での教会の働きが期待されています。今回の会議があった南アフリカはアパルトヘイト撤廃後、積極的に民族融和が図られていますが、なお貧富の差など多くの問題を抱えています。私たちが当たり前だと思っていることが、当たり前でない多くの国々の現状があります。教会がどのように福音を具体的に証していくかは今後も大きな課題です。

5 世界規模の宣教協力

世界規模での宣教協力が進もうとしています。確かに日本は言葉のハンディがあります。英語を主要言語の一つとして取り入れている国々の多くの人々にとって、このような国際会議に参加するハードルはずっと低いことでしょう。またラテンアメリカの人々が国が違っても一緒に賛美する様子はとてもうらやましくも感じました。しかし、それにしても、日本の青年たちが若いうちに世界に触れる経験をさせることはとても大切なことだと思います。物怖じせず、前に出て行って、世界の中で責任を果たすことのできる日本人青年たちが育ってほしいと願います。そのためにも、アーバナ大会への参加・宣教旅行への参加などを促し、青年たちが世界規模で友人を持てるように励ましていくことはとても大切だと思います。

6 真理としての聖書に立つて

相対的な価値観に支配され、絶対的なものを危険視する時代の風潮の中で、今回、カトリックや、世界基督教協議会（WCC）のゲストなども迎えながら再確認したのは、自らを絶対視するのではなく、御言葉の絶対性を土台とするということです。そこにあったのは、変わるもののなく、誤りのない神の言葉である聖書に立ち、普遍的な教会の交わりを大切にしながらも、各個教会を大切にしていくという基本的な姿勢でした。私たちは真理としての御言葉を確信を持って伝えていくのです。今回の会議が毎日、聖書の学びで始められたのもその姿勢の一つだったと思います。

Ⅱ 日本からローザンヌへ・・・世界の教会への日本の貢献ということ

多くのことを学ばせていただきながら、それでは、アジアという文脈、クリスチャンがマイノリティーで、伝道が必ずしもめざましく進んでいくこともないが、それでもこつこつ歩んでいる日本の教会が、世界に対して何を貢献し、何をチャレンジするのかというのも大きな問いかけでした。

1 世界に仕える日本人たち

今回も日本から世界に出て行っておられる宣教師の先生方とお会いすることができました。また、直接宣教ということができない国々へも様々な形で日本人キリスト者たちが出て行っています。今回、ネパールからの代表団の方々とお話しすることができました。私は小学二年生の時に、岩村昇先生の書かれた「ネパールの孤児マヤ」という本を読みました。ネパールで医療宣教活動にあたられた岩村先生がネパール人の孤児を育てる話なのですが、私が献身するひとつのきっかけになった本です。私は彼らに、「岩村昇先生を知っているか」と尋ねてみました。彼らの答えは「もちろんだ。ドクターイワムラはネパールでとても有名だ。とても尊敬されている」ということでした。すでに多くの日本人たちが主の召しに答えて世界で活躍している・・・これは私にとっても大きな励ましでした。

2 日本から世界への発信！

今回の会議の中でディアスポラへの宣教の働きが紹介されていたのはすばらしいことだったと思います。つながりの中で生かされているのだと言うことを確認し、もっと多くの発信をしていくこと、自分の考えていることを理解されようとする努力が必要でしょう。

確かに、日本で伝道する私たちには日本はいつまでも、宣教が進まず、また牧師・教会員の高齢化、教会学校の弱体化、世俗化や相対化の影響の中で、教会はもがき苦しんでいるように見えます。そのような中で、日本の教会は世界の中でも、ともすると縮み思考で、遠慮して、沈黙してしまう。けれども、日本の教会でなければ、分からない神様の恵みのニュアンス、日本の教会にしかできない、世界の教会への貢献があるはずです。日本語は日本でしか通じません。けれども、神がそんな日本を置いておられると言うことの中に、神がこの国に託しておられる特別な使命をも感じます。私が日本語を話せるということの、大きな意味を感じます。ただ、会議に出て、学んで、よかったというだけではなく、これからはさらに積極的に日本の教会からも発信をしていくことがとても大切だと思います。

今回の会議を中心になって企画してくださったバーゼル先生は日本での宣教の経験のある方です。そのような意味でも、日本の教会の思いを分かってくくださる方で、私たちは南アフリカでもとても居心地良く過ごさせていただきました。多くの方々が世界中で日本のために熱い心で涙を流して祈ってくださっています。それは、単に日本の福音化が進むようにということだけではなく、日本が、日本の教会がその与えられた使命を果たしていけるようにということでもあると思います。その思いに、チャレンジに、答えて行く責任が私たちにはあるのです。

今回は、諸外国の代表の方々ととても良い交わりが与えられましたが、同時に、日本の代表団の牧師・信徒の方々ととても幸いな交わりの時が与えられました。今後の、超教派の働き・交わりなどにおいても、これらのつながりがまた生かされていくものと信じています。

ネットワークムーブメントが生かされるために 福井誠
ローザンヌ報告
日本バプテスト教会連合玉川キリスト教会牧師 JOMA 会長

2010年11月29日

もともと海岸地方で育った者である。しばし水平線に沈む夕陽を眺めたく、海岸に出た。記憶にある日本海のそれとはいささか違うが、雄大にクジラが潮を吹く様は、見ものであった。こうやって自然に浸っていると、身体のコまでリセットされてくるような気分になる。やはり人間は塵から造られたものなのだと思う。そんな大地の一角で繰り広げられた CT2010 であるが、これもまた、今与えられた地域に浸透する福音を考える一時となった。

ローザンヌ運動というのは、「世界宣教の進展を教会の使命として確認し誓約する」のが中心であるという。1974 年第一回のローザンヌに対する評価は、二つ。福音派の連帯を生み出し、福音の文脈的な実践に対する意識を向上させた。しかし、1974 年のそれは、問題提起で終わったと言うが、宣教のみならず現実社会の課題に向かい合う責任を明確にしたのだから、それ自体評価されることなのだろう。

以来、宣教と社会的責任のバランスを巡った議論が展開された時代もあった。私は、宣教命令と文化命令を区別し、社会的責任の重要性を意識しながら宣教命令を強調するのがローザンヌの立場だと教えられたのであるが、その時ですら、委員会の中でも見解は様々で、欧米の委員の立場は、宣教命令と文化命令を区別しない全体的福音であるとも聞いていた。それから約 36 年経って、「全教会が全福音を全世界にもたらす」という CT2010 では、委員会の諸見解も均されて歩調が揃ったということなのだろう。実際、今回の CT2010 は、各国の福音派が、問題提起された社会的責任の問題、いわゆる貧困、差別、紛争、飢餓といった様々な課題に、その後どう取り組んできたのか、結果を報告するケースカンファレンス的なものであったような気がする。

ともあれ、今の自分が置かれた立場からすれば、今後このローザンヌ運動とどのように関わっていくべきかを考えざるを得ない。小さな日本の福音派の中で、似通った組織がいくつもできてくるというのは、結局少ない人材とリソースの奪い合いになるだけで、必ずしも宣教の推進にはプラスにはならないこともあるだろう。そういう意味で、JOMA が、日本の世界宣教の推進役として活動を展開していくにあたり、ローザンヌ運動と協力するほどよい関係はどのようなものであろうかと考えた。似通った啓発的な組織として、日本宣教会、関西ミッションリサーチセンター、東京ミッション研究所、国際宣教センターもある。今後こういう組織とどう関係づけされていくのか興味深いところである。

ただローザンヌは設立経緯からしても、基本的に個人参加の運動体である。個人が自主的に関わる中で、組織化されずに自由に燃やされていくところに、その運動体としての命もあるのではないか、と思うところがある。自発的なネットワークムーブメントとしてローザンヌが生かされていくことを願う。

包括的な福音を全教会の対話の中で 福田 崇
国際ウィクリフ聖書翻訳協会

1. 今後の課題：

ローザンヌのDNAの一つにパートナーシップがあるかと思います。国や、地域、教派・教団、宣教団体・援助団体など、それぞれには存立の基本的な立場・ビジョンなどがあります。しかし何よりも神の国のために、教会の一員として、お互いにキリストの体に属しているものとして、協力して働いていくことが今回も強調されていたと思います。各種ミニストリーが協力して働くことにより、無駄が省けるだけでなく、それぞれの働きの成果がそれだけで完結するのではなく、互いに有機的な関係の中で事がすでに進んでいっています。日本でも、インターネットによる伝道を推進する団体や教会が多く存在していますが、今後どのように協力するか（例えばフォローアップの面、教会紹介の面など）が課題だと思います。

また「Integral Mission」という用語で The Cape Town Commitment の第10項 We Love the Mission of God で詳しく説明されている事柄が、今回深まったと思います。AIDSの方が証しをされましたが、環境問題、貧困の問題など人類が直面する共通の課題について、取り組んでいく協力関係も推進されたのではないかと思います。「宣教：Mission」という用語の中に、社会的な責任、キリストの愛に基づく実際の奉仕が含まれていることが今後は標準になるかと思います。

少数民族への聖書翻訳宣教を推進している団体に属する者の立場からは、聖書の真理性、宣教における人々が理解できる言語（母語）による聖書の必要性、またその聖書が様々なメディアで提供されることの必要性などが語られていたことはうれしいことでした。毎日、5分間のビデオが、「Scripture In Mission: Eradicating the Bible Poverty」として流れました。Forum of Bible Agencies Internationalに属する10余りの団体が協力し、それぞれの団体の名前を出さずに、聖書の重要性に焦点を当てたビデオが作成されたものでした。（ローザンヌの協力精神が活かされた例かと思います。）

参加人数としては、非西欧の人々は62%でしたが、意見の表明という面では、少数派ではなかったかと思います。ペンテコステ派の人々、各国の正教の人々、ラテンアメリカの人々、アフリカの人々、アジアの人々、大洋州の人々、各国の先住民族の人々など、彼らがもっている課題、問題意識などが十分反映されていないのではないかと感じました。私は Dialogue Sessions の中で、Indigenous Theologizing and the Mission of God というものに参加しました。Richard Twiss という北米の先住民族文化の人がリードしましたが、自分たちの民族のすべてが偶像礼拝として全否定され、白人文化がキリスト教文化と同一視され、それへの同化が図られて行った歴史の中から、それは違うのではないかと模索を始めている中での提案でした。北米の先住民族は、居留地へ押し込まれ、子供たちは親元から離れた寄宿舎に入れられ、先祖伝来の文化が断

絶することが意図されていました。その寄宿舍はキリスト教の各教派・教団が運営を委託され、善意からですが、宣教の目的のために運営しました。これらはアメリカの Manifesto Destiny の神学に基づいて、拡張主義・勝利主義の中で、進められていきました。Richard Twiss さんは、それぞれの民族の歴史、その中で働いてこられた神の御手を認め、超越している神が、内在して働かれていることを重く受け止めています。彼の著書に「One Church, Many Tribes」があります。それぞれの民族・文化の中で真に花を咲かせるキリストの命に信頼しています。

過去 200 年間の近代世界宣教は、マタイ 28:18 やマルコ 16:15 などが中心の聖句でした。しかし今後は、今回のローザンヌ会議の中心聖句であった「神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ」（2 コリント 5:19）などが浮上してくるのではないのでしょうか。すなわち「和解」「平和」「正義」などが大切なテーマになってくるかと思われます。宣教への取り組みでも、神によって派遣されている面を優先し、相手を下にみるところから脱却していくでしょう。Richard Twiss さんは、次のように言っていました。「私たちは、他民族に行く時は、ゲストとして行き、受け入れられてそこに滞在する。その民族の歴史を、物語の形で聞き、その中で生かされている知恵を学ぶ。尋ねられれば自分たちの歴史を物語り、キリストに出会って、民族が豊かにされてきたことを証しする。」その宣教には、他民族との和解の側面が含まれています。北米先住民族同士の争いの歴史から、和解と平和へ進むことと個人の救いが密接につながっています。今までの欧米の救いの理解は、民族のあり方、国家のあり方と切り離され、個人的な領域にとどまっていたのではないのでしょうか。自己の属する民族・国家が他の民族・国家を支配し、搾取する構造などには、従って目が閉ざされた状態になっていたのではないかと思います。しかし過去のことを言うのは簡単です。私たちも現在の課題に対して多くの場合鈍感なのだと思います。中絶の問題なども、大きな課題ですが、そんなに意識していない現状があるかと思います。真摯に主の導きに従うものでありたいと思います。エペソ 1:10 にある「天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。」のみことばを味わいたいものです。

2. 南アフリカ開催に関して：

私が泊ったホテルの近くに、奴隷収容所を博物館にして保存してある場所がありました。また近くには、奴隷のための教会のあとが博物館になり保存されていました。博物館の隣にアンドリュー・マーレーが牧会した教会があり、その前に彼の銅像がありました。マーレー(1828-1917)について、調べてみました。スコットランドから南アフリカへのオランダ改革派の宣教師の息子として、南アフリカで生まれ、教育は母国で受けました。生涯で240冊の著書。1860年代の南アフリカでのリバイバルで用いられた器です。またウエールズ(1904-1905)のリバイバルで中心的な人物であった Jessie Penn-Lewis に大きな影響を与えました。また南アフリカ宣教団の創設者の一人で、その宣教団が合併を経て、現在の SIM インターナショナルになっています。ユグノー派によって始められた南アのオランダ改革派教会は19世紀末までに、黒人、混血、インド系、白人と人種によって分離されるようになり、20世紀に入っ

てそれぞれの教会を形成するようになりました。オランダ改革派教会は、奴隷制度を合法化し、維持していくアパルトヘイト神学を確立していきました。

ホテルでやっていた映画が、アメリカの「地下鉄道」というものでした。今回、私は南アフリカに行くので、奴隷制度について少し調べ、その中で見つけた「ゴスペルの暗号」という本を現地で読みました。アメリカ南部の奴隷が北部の奴隷制度を廃止している諸州やカナダに逃亡するために、設定された秘密のルート、ネットワークのことを地下鉄道と言います。特にクエーカー教徒など、平和を大切にしている教派のクリスチャンが協力し、隠れ家を提供していました。黒人聖歌は、こうした逃亡奴隷に情報を伝える暗号であったというのがこの本の趣旨でした。またこの映画の中では、奴隷のセリの場面があり、体をたたいたり、睨みや口を開けて、まるで品物の「鮮度」でも調べているかのような仲買人、セリが始まり、どんどん値段が上がって行く状況、セリをしている人が、「この奴隷は良く働くよ」、と言いながら、値段を吊り上げていく状況等、ちょっとショッキングなシーンの連続でした。魚を買う時に、えらの後ろを見たり、目を見たりするのと同じです。アフリカから北米への船の中で、病気になった奴隷は、すぐに海に捨てられ、他の奴隷に病気が移らないようにされました。約半分の奴隷が海に捨てられたそうです。夫婦の奴隷は、別々のところに売られたり、子供はすぐに取り上げられたりしました。しかし子供が生まれるのは、奴隷が増えるので歓迎されていました。

アメリカでは11月に中間選挙ですが、保守派の巻き返しが報道されています。保守派(すなわち共和党で白人主体)は、アメリカの独立宣言にうたわれている「個人の自由」を大切にします。しかしこの独立宣言の言う「個人の自由」の「個人」には、奴隷や北米の先住民族は含まれていませんでした。独立宣言を起草し、署名した白人の政治家は全員、奴隷を所有していました。これに対して、民主党は、アメリカで少数派であった、カトリック(後のケネディーもカトリックで民主党)、アメリカインディアン、メキシコ系の人々、アジア系、労働者の側に立ち、独立宣言でうたわれている「自由」にこうした少数派の人々を含めるように努力してきました。アメリカの良さは、このように自由を戦い取ってきたことです。

ローザンヌも、実は北米主導でしたが、北米の白人主導です。白人にとっては、自分たちの優位、覇権を維持することが無意識のなかにあるように思います。口では言わなくても心の底には、優越意識を持っている人が大部分だと思います。ローザンヌでも、少数派の北米先住民族、ラテンアメリカの人々、アフリカの人々などが持っている課題、すなわち、その歴史への清算が底流にあります。表立っては出てきません。今回も、一回もアパルトヘイトについての言及はありませんでした。これは南アフリカの教会がローザンヌ委員会の方に上げないように申し入れたためのようなのです。今だに傷が癒えずにいる教派間、教会間、民族間の現実があるようです。またそれをすると、ヨーロッパからのアメリカへの白人移住者は(今の共和党のライン)、4000万人いた先住民族を虐殺し、20万人になった事実を取り上げなくてはなりません。アフリカでヨーロッパの植民地経営をした諸国(イギリス、オランダ、フランス、スペイン、ポルトガル、イタリア、ドイツ、ベルギー)の歴史が出てきます。こうしたことが、議題として取り上げられるのは、あと数10年かかるのではと思います。

日本も植民地経営をした白人の欧米諸国にならい、その一員として他国を侵略していきました。日本が歴史に真摯に向き合い、アジアで尊敬される国となるために日本の教会が果たす責任は大きいと思います。中国と韓国と和解が進むようになることがその前段階だと思います。日本、韓国、中国の教会が力を合わせて神の国建設のために労することができるように。それでいて、卑屈になったり、何でも中国や韓国の人が言うことを「はいはい」と聞くのではなく、韓国人が良く使う「自尊心」「誇り」を日本人として持ち、主の体に属する一員として、力を合わせることができるよう祈っています。

3. テーブルグループについて：

私のテーブルは、トロントのピープルズ教会の主任牧師（オズワルド・スミスが牧師をした）のチャールズさん、ナイジェリアの世界宣教団体協議会（合わせて6千人の宣教師を派遣している）の総主事のテモテさんと私の3人でした。それに2回ほどパトリックというイギリスの人で、子供の福祉のために働く団体の人が加わりました。私は、登録するところで、テーブルリーダーになるよう頼まれ、遅れてきた人のためのオリエンテーションに半日参加しました。ところが私のテーブルは3人ともテーブルリーダー訓練に参加したことがわかり、協力して、良い学びをしました。

テーブルでのエペソ書の学びは、1時間ですが、御言葉への取り組みとして、これが礼拝の、あるいは小グループのフォーマットになりうると思いました。またその日より柔軟に対応し、変化がありました。

1. 4分：壇上のリーダーがその日の個所の背景の説明。
2. 7分：個別にみ言葉を読む。観察する。
3. 9分：観察したことのグループでの分かち合い。
4. 20分：説教者による説教。
5. 10分：適応をグループで考え、分かち合う。
6. 10分：御言葉への応答の祈りをグループで。

チャールズさんは、世界の非西欧での主の働きに心が開いているが、限界を感じつつも、学ぶ姿勢があります。西欧世界で価値観が相対化し、他宗教が隣に引っ越してきた状況でどのように真理を証しするかに関心があります。ナイジェリアのテモテさんは、Third World Missions Associationの理事で、5月に東京で開催されたエジンバラ2010東京大会の副会長。イスラム教原理主義者により事務所を銃撃されたり、教会が焼かれたりする中での宣教。非西欧のリーダーシップへの要求が強い方。それにもかかわらず、みことばに虚心坦懐に聞く姿勢が土台。私はといえば、西欧でスタートし、西欧がいまだに中心の団体の所属。それぞれが分かち合ったが、聖書の基本的な教えについては同じ理解でも、それをどう生きるか、どう伝えるかなど、住んでいる世界があまりにも違うことが歴然としていました。21世紀になり、基督教の歴史で初めて、教会が世界的な教会として登場してきていますが、西欧中心から、神学的にも、宣教の実践の面でも、やっと非西欧との対話の端緒が開かれたような気がします。

第三回ローザンヌ世界宣教会議

ケープタウン2010年の観察と未来への展望 ゲーリー藤野

日本バプテスト宣教団宣教師

日本駐在外国人宣教師として南アフリカのケープタウン市であった第三回ローザンヌ世界宣教会議(CT2010)に参加した者ですが、このレポートをその立場から書かせていただきます。

会議の観察と励みとなったもの(Observations/Encouragements):

- このCT2010を通して世界的なレベルで史上初の一番代表的な宣教会議、否、教会会議が南アフリカにてもたれたことを主に感謝を申し上げます。
- 結果としてはケープタウンでのCT2010の影響はこれから先何年間も世界中の世界宣教に偉大なる影響力を及ぼすに違いありません。特にケープタウンコミットメントという世界宣教決意表明は将来的に大きな役割を果たすべきだと思います。
- 日本からのいわゆる「教職者」でない方々の参加は戦略的だったと思います。例えば、舞台上、高奈美香姉の賛美や裏側で一生懸命に奉仕してくださった立石姉や大木孝裕兄の仕える姿勢は模範的でした。それに加えて青木勝氏のようなビジネスマンの参加は異なった「味」をローザンヌ活動に貢献してくださったという印象を持ちました。とても感謝すべきことでした。
- 日本人宣教師の参加も重要だったと思います。竿代先生を初め、ブラジルの湯浅氏、ウィクリフの福田氏と永井氏、タンザニアの清水氏、など(私の知る方々は非常に少なくもって沢山おられたと思いますが)、彼らのご参加を通して私自身は宣教師同士としてとても励まされました。その上、彼らのような方々による日本の世界宣教への展望と貢献は大きくて明るいものだという感じがしました。
- ケープタウンインターナショナルコンベンションセンター(会議場)のスタッフやケープタウン市民の前に、参加者のクリスチャンとしての証しは好意を持たれ、良く評価された証しだったそうです。
- 「テーブルトーク」を通しては4000人以上の会議で親密感を築き、その一週間の間に6人ごとで互いに祈り合い、聖書を学び合い、そして本物の交わりを体験し合うことが出来ました。
- アフリカ大陸にある教会とその宣教は、ケープタウンにて積極的に、そして躍動感をもって証しされ、またはアフリカ大陸のすばらしさがポジティブに表現されていたという印象でした。
- 「パッション(情熱)」、「謙遜」、「祈り」や「聖霊の働き」が目立ったテーマでした。会議中、「筋」のように、どこにでも、いつでも、誰を通して、常に証しされたテーマでした。

学んだこと(Lessons Learned):

- 「偶然」あるいは一見「ランダム」に人々と出会うようなことが多くありましたが、その背景を探ると、「神様が引き合わせた体験」のような出会いもそのなかに多くあったようです。このような「出会い」を通して奉仕への手助け等が良くなされていました。意思と目標をもった神様が引き合わせて下さったに違いないという導きを強く感じました。
- 「霊の戦い」ということを良く聞きました。「悔い改める」ことや「へりくだりなさい」というメッセージは絶えず語られました。世界レベルのリーダーたちの集まりにもかかわらず、人間は神様に拠り頼むべき(霊の戦い)であり、謙遜であるべき(悔い改め)であるというメッセージは、本当に必要なものでした。
- “Integral mission”「統合的宣教」という新しい言葉でしたが、包括的で統一された「宣教」というのは「福音を宣言する」と同時に「人間を具体的に愛する」ことだというような考え方や生き方が紹介され、指摘されました。いずれかを強調するのでもなく、そして片方を優先するのでもないということでした。ただ単に「ありのまま」で両方を「表裏一体」と認めて実行すべき、という新鮮な宣教への意味合いが表現されていました。
- 「変革」は社会的なレベルから、あるいは教会のレベルから始まるのではなく、私自身から始めなければ「どうしようもないことになる」ということに気づかされました。そして、逆に「自分が変えられました」ということを言ったとしても、日本や教会に帰ってからも、その「変革」がまわりの人々や教会のメンバーに見えず、隠されているとしたら、それこそ「どうしようもないことになるのが分かりました。ですから、何より「自分自身から」の実践や適用ということが大事であることが分かりました。

未来への希望(Hope for the future):

- 「これを継続して行きたい」というスピリットが強かったようです。「ローザンヌのスピリットを続けましょう」というのは会議中によく訴えられていましたが、日本のローザンヌ委員会にもそのスピリットがあったようです。もっとこのスピリットを日本中の教会やクリスチャンに広げて行きたいという意識は、印象的でとても励みになりました。
- 特に、「ローザンヌのためにより若いリーダーたちを日本の教会から育てて行きましょう。」という声何人かの先生からあがりました。私たちには、これからの世代への責任があると思います。もし、第4回ローザンヌ会議が開かれるなら、それまでに私たちは若いリーダーたちを建てあげていくことができるでしょうか？このことこそ、これからの「ローザンヌ・スピリット」を継承していくための話題と挑戦になると思います。

Cape Town 2010 の直後の印象と考察 藤原淳賀
聖学院大学総合研究所教授 / 日本バプテスト連盟 恵約宣教伝道所牧師

Cape Town 2010 (ローザンヌ III) への参加は極めて有益であった。2002 年に韓国で行われた ALCOE V というアジア版ローザンヌ運動の集まりに、(当時勤めていた) 東京基督教大学から出席させていただいたが、それには失望した。ほとんど得るものはなかった。それ以来ローザンヌ運動には関わらないようにしていたが、今回また声を掛けていただいたので、もう一度仕切り直すつもりで出席した。Cape Town 2010 は期待を遥かに越えて素晴らしい会議となった。大半は、帰りの飛行機の中で書いたものであるが、一月後に少しでも手を入れた。直後の印象と考察として以下5点を記したい。他の人よりも少々長くなっているようだが、1枚よりも長くなってよいということは編集担当の永井先生に香港での乗換時に確認させていただいた。

1. 神のミッションの視座

私は7年前に教会を開拓した時にその名に「宣教」という言葉を入れ(恵約宣教教会)、その重要さは常に意識しているつもりであった。まだ小さな教会ではあるが、伝道師が宣教師となる準備をしていることもあり、毎年何人かの信徒を海外の宣教地に短期で送るようにして来ていた。しかし私自身は「世界宣教」に触れる機会はほとんどなかった。

しかし Cape Town 2010 がその機会となった。毎日、世界規模での宣教の報告が行われた。多くの魂を揺さぶるような証しもあった。またアフリカ、中東、旧ソ連、またアジア諸国、南米からの参加者たちに会い、宣教の様子に生で触れ、証しを聞き、一緒に食事をし、お茶を飲み、語らうことができた。

「凄いことが起こっている。」これが実感である。世界の宣教がどのような規模で進んでいるのかをおおよそ知ることができた。中国からの参加予定者約 200 名が空港で当局に拘束され、参加できなかったが、これも宣教地の現実の一つである。われわれは彼らが本来座っているべき空席に手を置いて中国伝道のために祈った。イスラム教圏での伝道の様子を観た。イスラム教圏の女性たちが黒いベールをかぶって、キリスト者として礼拝している姿を観たときには心が震えた。(当然のことながら撮影、録音は禁止された。)宣教師は伝道が禁じられていても、神の言葉を語り、神の民はあらゆる場所で育ちつつあった。

第一線で伝道、牧会、教育を行っている彼らの内に、自分の内にあるものと同じものを感じた。特に参加者の方々と個人的に話をした時にそれを感じた。この人たちが、同じ DNA を持っている主にある兄弟姉妹であり、同じ主に召され、それぞれの地でその御わざに関わっていることを直観した。

人は神の視座からものを見ることはできない。しかし、神の視座に思いをはせて世界宣教を考えることはできる。そしてそのようにして自分の関わっている日本での宣教を位置づけることができたのは大きな収穫であった。

2. 苦難

「苦難」は重要な神学的テーマである。しかし北森嘉蔵の「神の痛みの神学」を生み出したにもかかわらず、日本での苦難の議論は不十分である。日本の教会は、(表立った戦争協力までは至らなかったが、また迫害をされた教会もあるが)、戦争やキリスト教への弾圧に対して明確な抵抗をすることができなかった。開国後の日本のキリスト教は、戦時も苦難を上手に避けて来たキリスト教である。

日本の主流派のキリスト教は上層階級から入ったため上品で文化的なものを好むエリート志向があることが指摘されてきている。教会が小さいから実現していないが、日本の福音派も、街の中心に大きな会堂があつて社会に一目置かれる「立派な」キリスト教に(おそらく無意識に)心が向かっていると私は見ている。そういう人や教会は、医者や政治家、弁護士や、社長や金持ちに近付く。そういった「偉い人」がクリスチャンになれば証しになり、影響力が大きいと考えている。そういう人や教会は、キリスト者として生きることの「苦難」を語らない。「苦難」は試金石である。キリストの苦難だけでなく、キリスト者の苦難を重んじない者に本物の信仰があるかどうかは疑ったほうがよい。

今回、2か月前にアフガニスタンで夫が殉教した夫人の証しがあつた。殺戮で家族と同労者を失ったアフリカの牧師も話された。苦難の証しは宣教報告の当たり前な一部分であつた。ローザンヌ III は苦難をその一部として認識していた。

西洋のキリスト教を表面的にアジア化、日本化しようとする浅薄な「文脈化」の試みを聞くことがある。しかし矢内原忠雄はむしろ日本には日本独自の苦難があるはずだと言った。苦難についての神学的思索はもっと深められなければならないであろう。

3. アフリカの教会の成長

ケープタウン会議では論じられていなかったが、最近の統計結果から韓国のキリスト教人口の減少が起こり、伝道が強調されていることを同僚の韓国人研究者から聞いていた。ヨーロッパの教会の停滞・減少の問題はずっと深刻である。ヨーロッパの教会に将来はあるのかといったセミナーも開かれており、参加してみた。いわゆるキリスト教国、西洋諸国でのキリスト教人口は減りつつある。その一方で、アジア、南アメリカでの宣教が進んでいる。イスラム教徒への宣教は容易ではないが、確実に進んでいた。

今回驚いたのは、アフリカの教会の成長である。アフリカの教会はこの100年の宣教で、宣教地の教会から、宣教師を送り出す教会へと成長して来ていた。数の上でも教会が成長を遂げているが、それ以上に素晴らしいのは、優秀で知的で円熟しダイナミックなリーダーシップのあるアフリカ人の指導者に今回、何人も会ったことである。確かに(クリスチャンになると成功するといった)プロスパリティー・ゴスペルの問題はアフリカでもあるようである。しかし、どこに出しても恥ずかしくないリーダーがアフリカに育っていた。

翻って思うのは日本である。プロテスタント宣教開始から150余年。多くの人材とお金とエネルギーが投入されて来た。そしてその結果が未だ1%のキリスト教人口である。宣教活動は、神の主権と聖霊の働きの中で行われるのであるが、世界の普通の

基準で見て「おかしい」と感じるほどの停滞である。リーダーに関してはどうだろうか。日本の教会が、世界宣教の流れからずいぶん取り残されているように感じたのは私だけではないであろう。今回のアジア宣教報告のビデオでも、日本は取り上げられていなかったように記憶している。

4. ネットワーク

ローザンヌ運動は機構ではなく、緩やかな運動である。今回出会った諸教会のリーダーたちとのネットワークを生かし、また既存の組織のネットワークを生かして、個々のローカル教会が世界宣教に関わって行くことができればと思っている。それが動き出せば他の人たちもそのルートを用いて行くことができるだろう。今回、何人かの日本人の先生方と親しい交わりを持つことができたことに感謝している。できることからできる人たちと一緒にできる規模で出来ればよいと思っている。

その送り出すことが、延いては日本の教会に祝福をもたらすことになるであろう。それは宣教が神の強烈な御心だからである。神はご自身と一つ思いになっている者を祝される。神の思いの流れにわれわれの心と行動が沿っていなければならない。神の御心に沿う時にわれわれは祝される。小さくてもいい。僅かでもいい。自分の規模で神の御心に沿っていなければならない。

5. 教会の一致

今回の Cape Town 2010 での毎朝の聖書の学びはエペソ書だった。教会の一致の問題が扱われた。

WCC の代表として来られていた方は、その開会式の挨拶で「ローザンヌとジュネーブは遠くないし、遠くあるべきではない」と語った。また教義問題を扱う分科会で、WCC のオブザーバーとして来ている東方正教会の聖職者に会った。彼は最後に発言をし、「議論を聞いていて自分はほとんど違和感がない。自分はなぜオブザーバーとしてここにいるのだろうかと思った。次回は参加者として来たい」と語った。直接会うことはなかったが、バチカンからの使者もいたことをあとで知った。

「世は、教会のクレディビリティを問うている」との重要な指摘が会議の中でなされた。本当に愛を持って互いを建て上げているのか、教会の一致があるのか。それが問われているということに大きな賛同の声があった。これは「教会が教会となる」ことといってもよい。

これだけの規模で、これだけのバラエティーを持って行われるキリスト教の会議が他にあるだろうか。(福音的な)教会が一つ声を世に対して発するという。ローザンヌ会議が継続される必要を私はここにも見出すものである。

ローザンヌ会議には神学的にはそれほど特筆するものはないが、これは宣教会議だからであろう。厳密でまた創造的な神学議論はむしろ、他者との相違点を明らかにする。宣教会議は神学議論の場とすべきではなく、一致できる包括的で建設的な立場に立ってわれわれを前へと進める場とすべきであるという知恵があったのだろうと推測する。

結語

今回の Cape Town 2010 は ALCOE V と比較して、その規模においても、プロフェッショナルリズムにおいても遥かに凌駕していた。直接話して、十分な手ごたえを感じる人たちがかなりいた。ステージからの発表、講演、プレゼンテーションもクオリティーが大変に高かった。

しかし私にとって一番大きかったのは、彼らの内に自分と同じものを感じたという点であった。喩えて言うなら、「初めて会った遠い親戚一同の大集会」という感じを Cape Town 2010 に持った。「何か似ている。確かに自分と同じ一族だ。」「うわっ、やっぱりそういう経験をして、そういうふうに応答したのか。今まで会ったこともなかったけれど、そこで父の声を聞いて、父の御わざに参加しているのか。」そういう感覚である。何か響く同じものを感じた。この人となら一緒にやっていけるかもしれない、というものを感じた。神の民の一員として共に 21 世紀の前半を走るべくバトンを託されていることを思わされた。

第3回ローザンヌ世界宣教会議に出席して 正木牧人

1. 福音派の蘇生

今回の宣教会議はその開催形態、大会内容だけではなく当日までのプロセス全体がそのまま福音派諸教会の21世紀の宣教に取り組む姿勢をあらわしたものであった。私たち日本の教会の今後の歩みのためのよきモデルを見たと思う。

この会議までの取り組みはさながらドラマのようだ。時代の求めに応答する 350 もの新しい世界大の宣教ネットワークを生み出し福音宣教に大きく貢献した 1989 年の第2回ローザンヌ世界宣教会議は、その後神学的深みを持たず失速していた。これに呼応するように世界の福音派諸教会ははたつと方向性を失っていく。21 世紀に入り福音派指導者の集まるラウンドテーブルで世界ローザンヌ運動再起の幻が確認され、優れた若い指導者たちがたてられて、彼らはまたたく間に世界の神学と実践のネットワークを再構築し、組織力や経済力ではなく幻と友情の力に信頼して第3回会議に向けての期待と協力の種をまき、フォーラム、青年リーダー会議、3 年に一度の責任者会議を上昇ステップに、これまで誰も打開できなかった幾多の困難や障壁を克服して福音派諸教会を動機付け、力を結集することができた。

歴史の流れを変える働きにリスクを覚悟で喜びと祈りをもって取り組んだ、最初は一握りだったリーダーシップの姿を身近に見てきたことは私にとって生涯の大きな財産である。

4200 人の参加者と 1200 人のスタッフ・ボランティアの集う新世紀のローザンヌ世界宣教会議が、クリスチャン人口の増加と生活上の苦しみの継続を経験しているアフリカの地、南アフリカ・ケープタウンの国際会議場で開催された。不安定な世界経済をおして 16 億円という驚くべき資源を投じて準備されたこの会議が、新しい時代に強いメッセージ性を持つ神学と練られたプログラムをもって、期待をはるかにこえたクオリティで開催されたこと自体が、大きなエネルギーを感じさせ将来の不安の雲を吹き払う大きなメッセージであ

る。それは決して一過性のものではない。大会を通じて感じられた世界観、すなわち苦しみを突き抜けるアフリカの陽気さ、欧米風の洗練されたスマートなステージ展開、テーブルグループに見られたようなアジア風の共同体的人間関係重視の姿勢がうまく統合された会議の印象のかたまりは、確実に参加者全員の心の深みにずっと届いたのである。それは生涯その場をあげわたすことはなく、世界の教会を帰宅した参加者の住む各地域から、また宣教の苦勞と喜びを分かち合った仲間として楽しく接合されたネットワークを通して結び合って、内から外へと変革していくだろう。

2. 問題を問題として把握する勇気と、 御言葉の力に信頼しきる安心

第3回ローザンヌ世界宣教会議の成果はその規模よりその内容にあった。戦争や貧困、迫害や矛盾という人間の罪と不義の実に正面から向き合った。

宣教が進めば自動的にその地域で戦争や紛争はやんで平和が訪れるというようなことはなく、信仰を持てば富や健康、成功がたなぼた式に手にはいるわけではない。厳しい苦しみの現実の続く中、これらの無責任でおめでたい楽観に入れ替わって強調されたのは、単なる悲観と無力感ではなく、御言葉のみが与えることのできる、苦しみをういて逆説的に働かれる神の不思議さへの信頼である。

また、信仰の生み出す愛のわざへの励まし、すなわち、力を合わせて懸命に宣教しながらも、社会的正義や福祉の実現のために世の人々と共に社会のインサイダーとして携わることへの促しである。

世界宣教は人ごとの情報、研究対象、説教の挿入例話ではなく、自分の生き方、価値観が常に立ち返る生活態度である。会議のリーダーたちの親しい友人のような気さくで真剣な雰囲気からも影響されて祈り始めた。主よ、どうぞ肩の力を抜いて、時間をかけ、人との心のつながりや信頼を構築しながら、世を愛しひとり子を遣わしてくださった神の誠と愛に留まって、人としてクリスチャンとして謙遜に、誠実に、シンプルに、そして創造的に世に関わらせてください、と。△

2010年ローザンヌ世界宣教会議雑感 松崎ひかり
アンテオケ宣教会専務主事（宣教協力・動員・祈祷推進担当）、JOMA 副会長

テーブルグループ

1日半遅れて香港からの女性が加わり、6名中4名が極東アジア系、2名が西洋文化の白人という、いささかバランスを欠いた構成で、アフリカまで来てアフリカ人がおらず、世界宣教の現場に存在感を増しつつあるラテンアメリカやインドの人もいなかったのが、私としては残念だった。

みな比較的冷めていて、テーブルの時以外は交わりもないグループだったが、ケーブ到着早々にパスポートを紛失した人あり、初めての子供の誕生間近な人あり、家族が危篤状態になって急遽帰国する人など、個人的なハプニングのゆえに祈祷課題を共有できたことはよかった。

何かの話の時日本宣教について問われたので、現実の厳しさを少々話したら、韓国人のテーブルリーダーが「日本は宣教師の墓場と言われているから、自分は、日本を目指す韓国人宣教師にいつも『よくも墓場へ行くものだなあ』と言うんだ。」それに対し香港の女性が静かながら真剣に「それは呪いの言葉だ、そんなことを言うべきではない。祝福するべきで呪ってはいけない。」と言って、一瞬妙な空気が漂った。私は「言われていることは本当かもしれないけど、まだ生きているクリスチャンも少しはいるし、神様は死人をも生き返らせる方だし…」と冗談めかして事なきを得たが、こんな事も極東アジア系が揃っていたせいだろうか。宣教の成果がなかなか目に見える形（数や規模）で出ない日本のキリスト者として、主の栄光のためには、世界の宣教者達に何を発信でき、すべきであるか、考えさせられる。

グループメンバー各自の任地での宣教に関する発言から：

- ◆ ボストンというアカデミックな町では、論述で知性的に真理を伝えるより、聖霊の超自然的な働きを目の当たりにすることが必要だと思う。超教派・超団体のパートナーシップと言っても、リベラルな社会や教会が同性愛聖職者や同性愛結婚を容認する中では、どうすればよいのだろうか。
- ◆ ニュージーランドではみな日常生活が快適過ぎて、自分の人生に神が必要だと思ってもいないことが障壁だ。
- ◆ 働きとして自分がしていることが、直接伝道につながっていないことに問題を感じる。

それぞれ私自身と日本宣教にも当てはまり、考えさせられた。

和解の福音と実際の和解（主の愛で愛すること）

こういう場に出ると、数少ない日本人キリスト者として、他のアジア人との関係に敏感にさせられる。各民族の歴史認識、民族間の罪の告白と赦しや和解などは、このレベルの世界宣教大会ではしばしば語られるが、感情も含めて未だにそれぞれに残っているものがあることは否めない。結局各個人が主の前に己を吟味し続け、積極的に平和を作り出す努力を続けるしかない。今回のローザンヌの主題は「和解の福音」だ

ったが、例えばメシアニックジュウとパレスチナ人クリスチャンが同じステージ上に並んで証をするという形で、福音による和解の結果を見せたものの、民族間の和解を推進する具体的な勧めやアジェンダは提示されなかったように思う。個々のイニシアチブ次第ということか。

十字架による和解は、赦し合うだけでなく、積極的に愛し合うことにいたるものではないだろうか。知的レベルの高いこのような大会では、各種のテーマのディスカッションが奨励され、盛んに行われたが、主の愛を言葉と行動でお互いに示し合い、それを受け取り合い感謝し合うことが、参加者の間でどのくらいされたか。ボランティアや大勢の裏方の祈りと犠牲的奉仕があったことは、誰しも認める。さて、一参加者の私は、他の方々と主の愛を分かち合えただろうか。具体的記憶も自信もない。

印象深かった講師・講演・プログラム

私自身がロンドンベースの時に、西欧社会におけるリベラリズムと多元主義、多民族化と異教の台頭にさらされる教会を目の当たりにし、日本でも同様の問題を意識していたこともあって、今回、多様化する価値観への寛容が進むこの時代にも、キリストが唯一絶対の救いであることの、教会としての確信・確認と、世界に蔓延する「繁栄の福音」に対して、キリスト信仰のゆえの困難・苦しみがどう語られるかに興味を持って参加した。だから初日の「真理」、3日目の「他宗教へのアプローチ」、5日目の「キリストの教会を再び謙遜、誠実、質素に」には格別の興味と期待を持って臨み、Oz Guinness の“6 Reasons Why Truth Matters”、John Piper によるエペソ3章と Calisto Odede による 4:17-6:9 のメッセージ、Chris Wright の“Humility, Integrity, Simplicity”から、期待をはるかに上回るチャレンジを受けた。これらはなお聞き返してじっくり消化したい。また、厳しい迫害や愛する者の殉教といった非常な困難の中で、闘いつつ信仰の勝利を見ている人々の証が、深く心に響いた。これぞ正に十字架を負って主に従うことで、主の福音が現世利益のみを強調するものではないことが、参加者全員にはっきりと示されたと思う。福音は至上の価値ある真理であり、文字通り命をかけるに値するものであることを再確認させられると同時に、そこまでの覚悟が自分にあるかどうか探られた。

今回のプログラムや会場の随所に、芸術による信仰表現、それもメッセージ性の高いものが配されていたことに、感銘を受けた。右脳、感性、魂に直接訴えかけるアートやそれを用いた黙想等は、偶像崇拜とは全く別物で、会場内のプレイヤールームもそれを上手に用いていた。以前から思っていたが、シンボリックなものを通しての信仰告白が極端にそぎ落とされ、重視もしてこなかった日本の福音派は、この分野とその根底にあるスピリチュアリティを再考する必要があるかもしれない。

毎晩のセッションでフィーチャーされた世界の各地域の中で、私の世界宣教奉仕のスタート地であり、最もよく関わり、今でも多少交わりを持っているラテンアメリカが、どのようなプレゼンをするか、特に興味があった。ローザンヌ運動の提唱する Whole Gospel…（全福音）の中に、実際的に必要に応える社会的責任が認識されるよう、20 数年前積極的に働きかけたレネ・パディジャ師とサムエル・エスコバル師が、ステージ

上で2人きりでそのいきさつを思い出語りのように話す姿は、話した内容もさることながら、何の演出もないだけに彼ら自身の存在がそのストーリーの具現化のように思え、彼らへの敬意と同時に映像的に記憶に残った。プレゼンの最後に、ラテンアメリカ各国からの若い参加者たちが、この2人の巨匠も交えて“Tenemos Esperanza”（私たちには希望がある）という有名な歌を歌った。その歌の繰り返しの部分は「だから今日、私たちには希望がある。だから今日、私たちは志を曲げずに戦う。だから今日、私たちは自信を持って見つめる。この私たちの地の将来を」というもので、未解決の社会的問題や経済力の弱さを抱えつつも、70年代後半以来、著しく伸びたラテンアメリカの福音派教会が、世界宣教のビジョンの浸透と宣教師の派遣で確実に実績を上げてきていること、自分たちに与えられた使命をしっかりと受け止める姿勢、信仰による確信が生み出す力を感じた。2人の巨匠の世代から、バトンは確実に受け継がれているのだと思う。

最後の聖餐式が、英国国教会の Sung Eucharist（唱詠聖餐式）の祭式だったことは、格別感動的だった。かつて英国からの多くの宣教師が命がけで宣教したアフリカ大陸が、様式だけでなくキリスト信仰そのものを自分たちのものとし、世界のキリスト者を主の食卓に招いている姿を象徴しているような気がした。式服を着た長身のウガンダの主教が、ステージ上の聖餐テーブルを前に中央に立ち、アシストするインド系の女性がその右に、ローザンヌ議長の米国人のバーザル師が左に、その背後に多様な民族背景の配餐係が並んだ様子は、この時代の宣教パラダイムの視覚的表現か。多くの課題を抱えつつも、GDOP（グローバル・デイ・オブ・プレイヤー：地球規模祈りの日）等の運動で今や世界に影響を与えているアフリカの霊性、それをもたらしている主の確かなみわざに、深い敬意を覚えた。

21 世紀の世界と日本の宣教のチャレンジを受けて 柳沢 美登里

声なき者の友の輪

1) 「一番印象深かったこと」・・・2010 年に世界宣教会議が開催された最大の意義は「宣教のパラダイム・シフトの確認と確定」。このことをさまざまな交わり、討論の場、講演、セッションで波が打ち寄せるように感じた。19 世紀以降の欧米を中心とした宣教師派遣国と欧米以外の被宣教国という二極構造が大きく転換し、「すべての民族、部族、言語グループからすべての民族、部族、言語グループへ」と、世界宣教が多極構造になったことを目の当たりにした。これこそ、キリストが昇天されるときに願われていたことではないかとアジア、アフリカ、ラテンアメリカ、欧米のさまざまな人種、民族の人々とキリストにあって昔からの知り合いのように語りあいながら、概念と現実が一致した場に置いてくださった主を賛美した。

さまざまな講演者が繰り返し使った言葉の一つが「宇宙規模 (Cosmic)」。

創造主である神の本来の広大さの視点を取り戻す緊急性を伝えてくれた。もう一つは「徹底的なライフスタイル (Radical lifestyle) を取り戻すこと」。これは、19-20 世紀の宣教方法であった、キリストを主と告白した人々に論理としての教理を教えこむだけでは、人が変わらないことに気づいたからだろう。今回の会議では、キリストに従うとは「生き方そのものの変革」という、21 世紀に目指すべきことが待ったなしであることをかなりの人が打ち出した。ローザンヌ運動の神学のまとめに関わるクリス・ライトが、福音派の強みである「聖書に徹底的に基づく」姿勢を生かし、旧約聖書から「神の世界宣教の本質」と「グループとしての生き方」に焦点をあてた「宣教における神の民の本質」を包括的に、創造からの歴史を通して整理し提示したことは、非常に意義深い貢献だと思えた。21 世紀の宣教の土台となることを期待したい。

「問題意識と今後の課題」・・・キリスト者の日本人として、これからの日本と世界の宣教について考えさせられていることが 2 点。神の似姿に造られた人間性の回復の一つは、宣教における「自律的思考と選択の推進」ということ。宣教地側からの振り返りの講演の後、親子 2 代、60 年以上西アフリカ全域で宣教を続け「西洋化と真の宣教の混同」による失敗から学んだ私のテーブル・グループのアメリカ人の発言。新しく造られたキリスト者として、自らの民族、部族、言語グループでの新しいグループ・アイデンティティの確立のためには、その文化の当事者たちが聖書に聴きながら格闘して自律的に生き方、礼拝様式などを選び取ることを励ますことが、外部の宣教者の役目だと。キリスト者になった日本人でどれだけの人が、自律的に聖書に聴きながら自分の生き方を選び取っているだろうか。宣教の場においても、その姿勢を大切にしているだろうか。欠落してきたものが何だったのか、ということと回復のアプローチに気づかされる。

もう一つは、私が深く共鳴を感じた「宇宙規模 (Cosmic)」という語から「地球単位で考える日本人の創出」の大切さを思わされている。宇宙と地上のすべてのものを創造された神を知らない日本人は、普段から地球レベルで物事を捉えることが苦手。神様は日本人の素晴らしさをご存知で、地球の人々とすべてのものの益のために貢献させたいと考えておられると思うが、地球単位で物事を見ることに慣れていないため、どこで何を貢献すればよいか判らないようだ。日本人が謙遜を保ちながら、聖書の神の「宇宙規模」の視点を見出し、回復されるようにと思わされる。

2) テーブル・グループ の参加者の名前・国名・働き・その人のことで印象に残ったこと

- ◆ Bonuke, Fedelis (ケニア、カベナント・リニューアル・アルター・ミニストリー主任牧師、ナイロビ在住)・・・「ケニアのキリスト者の大きな課題は、人の悪を根に持って赦さないこと。『心から解き放す (Let go) 習慣』を訓練することがとても大切。」
- ◆ Braun, Chris (アメリカ、CMA 西アフリカディレクター、セネガル在住)・・・前述。
- ◆ Breytenbach, Martin (南アフリカ、聖公会 Polokwane 司教, Polokwane 在住)・・・和解を生み出すとは？「80 年代、福音派教会はアパルトヘイトの法律を犯して、黒人と白人の間に家に招待し食事を共にして交わりを深めた。真の和解は、危険を冒しても一歩踏み出すことだと思う。」
- ◆ Hamilton, Nicolai (ドイツ、ルーテル教会牧師、ハンブルク近郊在住)・・・エペソ 4 章の学びで。『建てあげる (Build up)』という語は、主体的な行動を思い浮かべさせる。一方、『成長する (Grow)』は内側にあるもので自然に大きくなることをイメージする。キリストの体である教会の成長も、人間の側の働きかけと神の働きかけの双方の絶妙な組み合わせでは？」
- ◆ Reisacher, Evelyn (フランス、フラー神学校・現代イスラム宣教学、アメリカ在住)・・・イスラムから回心した女性たちの多くは、公の集まりに出られない。その彼女たちの信仰を支え導く聖霊の働き。女性の立場だから関われることを語り合う。

音楽について 山中先代
筑紫野二日市キリスト教会音楽指導者

§ 序：比較

2004年9月タイのバタヤで行われたローザンヌ世界宣教2004年フォーラム（130ヶ国から1,530名が参加、日本関係者は29名）、2005年7月英国バーミンガムで行われた世界バプテスト連盟百年記念大会（221ヶ国から12,000人が参加）、そして今回南アフリカ共和国ケープタウンで行われた第3回ローザンヌ世界宣教会議（登録者3,900名、奉仕者600名、合計4,500名が参加）。三つの世界大会の音楽面を比較してみたいと思います。

§ 1 各国音楽の表現の仕方

2004年タイのバタヤで行われたローザンヌ世界宣教2004年フォーラムでは、音楽面はやや粗雑で、民族文化の表現も不十分でした。

2005年の世界バプテスト大会では、全体会議でも、場外の催し広場でも、各国の賛美はそれぞれの言語と民族音楽で行われました。国単位の演奏でも、教会単位の場合でも、民族や文化の統一があったので、それぞれ最高の表現でした。それぞれ母国語で歌われ、言語も、音楽の種類や曲想も、それぞれの国や文化が代表されていました。会衆賛美では英語によるプレイズ・ソングやワーシップ・ソングもありはしましたが、各国・各民族の賛美は夫々の母国語でした。韓国のチームは琴で「ハレルヤ・コーラス」を演奏し、統制の取れたマスゲームをしながら歌う子供聖歌隊、扇子を使った韓国らしい舞踊を伴う女声合唱もありました。その中でも、静かで穏やかなグルジアの音楽や默劇は、最高の象徴性を持っていて、大音響の賛美よりも遥かに感動的且つ説得力のある信仰表現でした。

それに対しCT2010においては、オペラ歌手を含む各国の選りすぐった一定の代表歌手団が、朝・昼・晩とも固定したメンバーで歌いました。その歌声そのものは聞き惚れるほど高度なものでしたが、一人一人が高度でも、毎回同じスタイル・同じメンバーなので、単調にならざるを得ませんでした。

会衆賛美も概ね英語でした。

§ 2 音楽企画・編曲・演奏の統一性

音楽担当の主要責任者は、英国人ではなかったかと思われます。アメリカ西海岸で歌われるワーシップ・ソングもよく歌われましたが、古くから世界で共通に歌われている賛美歌も結構選ばれていて、その編曲も、現代風でありながら、クラシック風でもあったと思います。最高責任者、編曲者、指揮者、ソングリーダー、演奏者、合唱団などの密な連携と準備はさすがで、直前に渡された楽譜もあつたらしいけれど、選ばれた音楽家は即席・即興の技術を兼ね備えていて、立派でした。日本からは高奈美香さんが一人、頭のとっぺんから足の爪先まで和装で歌われました。何日も、朝・昼・晩声を嗔して歌われたので、心身ともにお疲れだったと思います。

§3 コイナー英語

世界中の教会で流行的に歌われているワーシップやプレイズは、どの国でも歌うことができる簡便さがあるにしても、伝統的賛美歌に較べると英詩の韻律・措辞等の約束事からはみ出ているものが少なくありません。したがって、流行が終わると消滅し、新しい曲に取って代わられる傾向があります。高奈美香さんも急な注文がいろいろあって大変だったようです。浴衣を着て日本語で歌う場合も、英語を無理に日本語に訳して歌うに過ぎませんから、日本を紹介したことにはなりません。やはり日本語独自の賛美が世界で歌われなければ、と祈られます。

他民族はどう表現されたのでしょうか。21世紀の世界では、「コイナー英語」が行き渡っているのでしょうか。何しろ南アフリカだけで公用語は11もあり、英語のみが共通語だそうですから、民族語が無数にあるアフリカ全体の共通語はコイナー英語にならざるを得ません。これは東南アジアでも同じです。

§4 中央スクリーンのすばらしさ

舞台の正面中央スクリーンの映像は、左右四つのスクリーンのものよりも技術的に数段上等で、実に素晴らしく、印象的でした。

CT2010 報告 山中 猛 士

筑紫野二日市キリスト教会協力牧師

§ 序：宣教と植民地

1971 年、「宣教師リビングストン発見百年祭」が西洋で華々しく祝われた。1881 年、長年行方不明になっていたリビングストンをスタンリーが発見した歴史的出来事の百年祭である。スタンリーは後に『暗黒大陸横断記』を著わす。西洋のこの慶事に、しかし、アフリカは苦々しく反撥した。宣教活動が植民地化の始まりだったからである。

1991 年、David J. Bosch の『パラダイム転換』が出版された。彼は 1957 年から 1971 年まで南アフリカ東部、アパルトヘイトのトランスケイ (Transkei) で宣教師、1971 年から南アフリカ大学神学部の教授、1974 年から 1977 年までと 1981 年から 1987 年までの二回、神学部長。出版の翌 1992 年 4 月、62 才の若さで自動車事故のため死亡した。

その国で第三回ローザンヌ世界宣教会議 (CT2010) が開かれた。故なしとしない。

1983 年以来関西ミッション・リサーチ・センターが『ローザンヌ宣教シリーズ』を出版、宇田進の『ポスト・ローザンヌ』は 1987 年に出版された。当時日本で議論されたのは概ね文化・文脈化であった。Bosch の *Transforming Mission* 『宣教のパラダイム転換』はまだ出版されていなかったのである。

今回ケープタウンを訪れ、パラダイム転換の実を目のあたりにし、「ああ、これだったのか」、「ここまで宣教のパラダイム転換が進んでいたのか」の感懷を深くした。

§ 1 プリ CT2010

ケープタウン行きの準備として、私は日本の文化文脈化を再考していた。日本の教会は問題だらけで、誰もが突破口を探している。しかしケープタウンで何があるのか、事前にはよくわからなかった。大会本部からは前年 11 月以来、*Lausanne Covenant* を読んでおきなさい、毎月指示に従って『エペソ人への手紙』を学び、祈りなさい、との指示を受けていた。しかし、何を期待すべきかわからなかった。今にして思えば、Bosch の *Transforming Mission* を読むのが一番良い準備だったのだ。日本では、欧米や、ましてアフリカ・東南アジアで起きていることに気がつかない。去年は宣教 150 年大会、第五回日本伝道会議があったというのに、我々は世界情勢に疎かった。

A. *Lausanne Covenant*

『ローザンヌ誓約』は序文と結語を除いて 15 項目からなる。1. 神の目的、2. 聖書の權威と力、3. キリストの唯一無比性と普遍性、全人類への救いとキリストの大宣教命令。性、民族、文化の相違を超えた伝道の急務性が盛り込まれている。

B. 『エペソ人への手紙』については、毎月、例えば、①「手紙全部を読みなさい」、②「神の聖徒への言及をリストアップしなさい。例、1 章 1 節「神の聖徒」・1 章 23 節「キリストのからだ」等」。③「地域と世界の教会が神の御心と神の声を聞くように祈りなさい」などの指示があった。今にして思えば、一年間かけて、確かに「三全運動」と、南半球が北半球を救うという、宣教と植民地の逆転が既に起きていたのである。

§ 2. 三全運動：「全教会が、全福音を、全世界に、伝える」

- A. 全福音（教会は福音の所産であり、全福音を所有している）
- B. 全教会（全教会は、全世界に福音を届ける責任がある）
- C. 全世界（全世界は、人種・言語・文化の多様性も含めて、神の創造したもの。
したがって、世界に暴力や差別があってはならない。）

この「三全」運動に当たって、これまで白人が「聖書を教える」立場から、全人種・全言語・宗教を含む全文化の誰もが「聖書を生きる」というパラダイム転換を行っている。白人優位の「聖書の学び」から、一人一人がその置かれた状況の中で福音を受け取り、適応し、聖書に基づく人生を、神と人との共働の中で創造して行くのだ。

§ 3. CT2010 の外枠

全体会議は毎日3回（1回目 8:45-10:15 聖書講義。2回目 11:00-12:30 聖書の具体的な肉付け、6人ずつ固定したテーブルでの分かち合いと祈り。3回目 19:30-21:00 アジア、中東、南米、アフリカ、欧米と言った大地域ごとの紹介）。北鮮からの2人の出席、中国人200人の足止め、特別な人の写真撮影禁止など、感動と緊張がこもごも走った。

午後は14:00-15:30 幾つかの中規模セミナーに分かれて討議。16:00-17:30 には無数の小規模セミナーに分かれた。具体的な問題は無数にあるものだ。

テーブル・フェローシップ。全参加者は6人ずつ一つのテーブルに貼付けられ、聖書を学び、分かち合い、祈り、交わり、相互を知ると同時に異文化における問題を知った。

私のテーブル#725には次の5名が居た。

1. エンマヌエル・F・ベンジャミン。インド国際学生フレンドシップ会。（リーダー）。
2. サイモン・ピーター・ムカマ。ウガンダ聖書協会総主事。
3. トール・ウジャ。ナイジェリア。開拓伝道宣教師を派遣する宣教協会。
4. ウィレム・ジューバート。南アフリカ。心理学者の妻と新しい聖書の読み方を開発。
5. タンディ・F・ランダ。インドネシア。エリクソン・トリット神学校教授。

この顔ぶれで、自己紹介、自分の長所と欠点の告白、相互の祈り。打ち解けた段階で毎朝『エペソ人への手紙』の手紙について学び、課題について各自自分の置かれた状況の中でどう応答するかを分かち合う。その質問とは、例えば‘Truth’について：

1. What are the primary challenges to Christian truth claims in your own context?
2. To what extent do pluralism and globalization shape perceptions of truth for the people you deal with?
3. What approaches do you find most fruitful for communicating that Jesus is the way, the truth and the life?
4. What insight from one of this morning's contributors has been most helpful for you?

これらの設問には、なるだけ否定的な見方を避け、プラス思考を引き出す方向性が感じられる。私のテーブルの人だけでなく、殆どの人がイスラム教徒と日常的に接触している。非常に興味をそそられたのは、イスラム教徒が、意外にも、伝道し易いと

いうことであった。尋ねてみると、イスラムはキリスト教と形が似ているので、「隠れキリシタン」が4種類くらい居るのだそうである。30～40年前はイスラム圏が最も伝道困難な地域であったが、現在は、日本が最も伝道困難な地域となっていると思われる。

§4 午後の大会で最もショッキングなゼミ：「聖公会の危機と、それを救った南半球の有色人教会」（聖公会・英国国教会主催）

北米聖公会（英国国教会）は世界的に大きな危機を迎えた。1776年米国独立宣言署名者の大半は聖公会員であり、20世紀前半には「大統領の教会」と呼ばれた。しかし、2003年11月23日、Gene Robinsonを司教に任命したことから教会員が激減。1960年には3,400,000人だったのに、2002年には2,300,000に落ち、現在では米国人口の1%以下に落ち込んでいる、と言う。

カナダ聖公会も礼拝出席者が1970年代の1,000,000人から1990年代の700,000人、2008年には325,000人に落ちた。

こうした聖公会の退潮原因は、①1960年代の教会憲法の改訂、②社会的ラディカリズム、③2002年のカナダにおける同性愛同士の婚姻祝福、④2008年の合衆国における同性愛司祭の叙任。遠因としては、①礼拝式文の強制、②離婚後の再婚の許可、③全教区における女性聖職者任職の強制、④神学教育の改訂、等が上げられる。

いずれにしてもその結果、多くの人が「聖徒達によってひとたび伝えられた信仰」（ユダの手紙1:3）に繋がっていたいと願うにも拘らず、立ち去らざるを得なかった。

それに拍車を掛けたのが、①反対者に対する厳しい除名処分と、②反対する教区や教会の不動産没収、③今も続いている教会財産に関する所有権と金銭の法廷闘争。

ところが、放っておけば大崩壊に到る教会を救ったのが、南半球の教会であった。第一はルワンダと東南アジア。第二は、ウガンダ、ケニヤ、ナイジェリア、南米諸国。白人の司教に代わって、アフリカ、アジア、ラテンアメリカの司教達が、教会を守った。嘗て植民地奴隷と白人が主人という立場が、実力において逆転したのである。

そこから聖公会が学んだ（と彼ら自身が語る）教訓は次の4点である。

- ①神の真理に立ち、反対者を除去するよりも、救いを主とするならば、教会は一致する。
- ②謙遜が神との協働を促進する。
- ③神は低き者を高められる。
- ④人的回心が福音の苦難と犠牲を深める。

これは北米教会勝利の物語ではない。むしろ、地上の教会全体の緊急援助物語である。聖公会だけの問題でなく、全キリスト教会の問題である。教会間での協力物語である。

ヨーロッパの教会は自由主義神学の影響で壊滅状態になっている。嘗て植民地であったアフリカ、東南アジア、ラテンアメリカなど南半球の教会が、今や白人教会を助けている。Global South が Global North を助けているだけでなく、形勢が逆転したのである。

§ 5. 中規模の分科会の一例「クリスチャン学者の会」(省略)

§ 6. 小規模の分科会の一例「神の宣教における民族性」(省略)

§ 結び：聖書の読み方のパラダイム・シフト：「聖書を生きる」帰納法的読み

『聖書神学事典』には伊藤明生教授がポスト・モダンの「聖書の解釈」(pp. 35～54)について書いておられる。説教者は説教に腐心しなければならないが、同時に説教を聞く者、聖書を読む者は、自分が生活している具体的な状況に福音なり聖書をあてはめて、「聖書を生きる」ことと真剣に取り組まなければならない。

伊藤教授は「テキストの意味とはテキストを書いた著者の意図ではなく、読者がテキストから作り出すものであるとさえ主張される。／こうした主張は、聖書学の伝統に挑戦状を突きつけるだけでなく、福音主義神学・信仰に脅威を与えている。パラダイム・シフト以降、共同著者として読者も意味の創造者である、と主張されている。」

(p. 44) と心配しておられる。勝手な個人的読みは問題であるが、ケープタウンで4,500人が6人ずつ一つのテーブルに分かれて親しい小グループを形成し、霊的・人的交わりを持って、選ばれた説教者から『エペソ人への手紙』の講解を聞き、説教者からの設問に一人一人が応答したことは、テキストを豊かにし、6人、いや4,000人に有益であった。

こうした小グループにおけるテキストへの帰納法的反応の突き合わせは、悔い改めと祈りとを要請し、異なる文化や社会状況が混在しているアフリカや東南アジアなどの雑混社会において、福音の真理に基づいた「聖書を生きる」道へと導き、人間関係を修復し、異教文化の真只中での伝道に役立っているのではないか。

それに対し、縦社会構造の日本では、権威ある牧師の演繹的説教を一方通行で聞き、各人の異なる問題や状況に適用されないまま信仰よりも道徳として残るきらいがある。説教者は命を賭けて説教しているのだが、聞く者は語られたことの何パーセントを受け止めているであろうか。心理学の統計をまつまでもなかろう。明治時代の宣教師が批判した日本の教会の、「一人の牧師の周辺に10人～20人の若者が群がっていて、それで牧師は満足している」という状況は、今でも変わっていない。縦社会と甘えの構造なのだ。

典型的な横社会のインドの牧師は、「自分の長所は誰とでも友達になることだ」と言った。日本では、牧師は友ではなく、上に立つ教師である。信徒でさえも、上に立つ伝道者である。誰とでも隣人になり、テキストを帰納法的に読む道は、如何であろうか。

～第三回ローザンヌ宣教会議に参加して～

「人を用いて、宣教を成し遂げられる神様」 吉田 隆

アジア・アウトリーチ・ジャパン

この度、ケープタウン2010年に参加することができ、多くの経験をし、たくさんのことを学ぶことができました。感謝します。

ダグ・バーザル師のリーダーシップ：ダグ・バーザル師は、日本で26年に亘り宣教師として活動しておられた方である。2004年にロンドンの図書館でローザンヌ宣教会議に関する調べものをしてい

る時に、第3回目の大会を実行するようにとの召しを神から受けたとのバーザル師のお証しに、私自身は大きく感動を覚えた。それからの6年間を準備に費やし、このヴィジョンに共鳴する人々の並々ならぬ働きによって、この大会は実現に至ったのである。

テーブル・グループ

私のテーブルは、エチオピアの大教会を牧会する経験豊かなゲトゥー牧師、同じくエチオピアの24歳の女性弁護士、ドイツ人の牧師、ケニアで超教派的に活動する若手牧師と私の5人であった。私が、テーブル・グループ・リーダーを務めさせていただいた。

ある時、分かち合いをする中で「日本のキリスト教状況はどうか？」という話題に及び、1%にも満たない現状をお話すると、テーブル・グループ全員に霊的な重荷が与えられ、その時間は日本のための執り成しの時となった。私は、テーブル・グループを導く司会者の責任を負っていたのだが、私の想定とは異なる聖霊様の嬉しい導き（展開）に、感謝を捧げずにはおられなかった。

テーブル・グループ・リーダーのための、朝の7時半からのミーティングは、突然の変更や翌々日の予定などが知られるなど、結構重要な連絡が行われるので、はずすことができなかった。毎日のフィードバックを参加者から聞き、それを通して、神様が何をこの大会に言おうとしているのかということ聞き取りとする主催者の姿勢に感銘を受けた。そして、その日12時半までで午前の部が終了するのだが、2時頃までにフィードバックが欲しいということだった。

ハッカーの関係で、メールでそれを伝えることは出来なくなったが、手書きで集められ、ある中間時点で2000以上のフィードバックがあったこと、手書きのものをパソコンに打ち込んでいる人がいることを知らされた。水曜日以降は、この朝のミーティングが、会衆全体に主が何を語っていっているのかを反映させるものになっていくという説明もなされた。

たしか、大会5日目だったと思うが、時間の関係で、グループディスカッションは今日は省略するという旨が講壇から伝えられた。しかし、この時までには、我がグループではグループディスカッションの価値・楽しさが分かってきたのか、聖書を読む時間を半分に減らして、是非とも我がグループだけでもディスカッションをしようという意見がでて、そのようにした。

最も感動したお証し

午前、午後、夜と、1週間の長きにわたる会議の中で、数多くの感銘を受けたメッセージや問題提起があったが、ここでは紙面の関係でその中の一つだけご紹介したい。

これは最終日10月24日（日）午前のエペソ人への手紙6章講解の中の一部で紹介された実話である。

レベッカ・アタラ姉がエジプトのカイロにあるゴミ収拾場のある村を見たのは、1982年、今から約30年前のことだった。ゴミが集まる中に、こどもたちも、家族も、動物も、全部一緒に暮らしていた。電気も、水道も、学校も、教会もない地域だった。

彼らは一応エジプトのコプティック教会に属してはいるものの、名ばかりのクリスチャンで「神様は愛である」ということさえ知らず、自分たちはゴミ同様な存在だと思っていた。その地域には、悪と暴力がはびこっていた

しかし、それから約30年経過した今、その地域や人々は全く変わった。わずか30年の間に、何がそれを変えたのだろうか。それは、名も無い1人の信徒の働きだった。彼はゴミの村に出かけて行き、その家族に証しをした

彼にはお金もなく、社会変革プログラムもなかった。ただ聖霊の力によって、はびこる悪の力に勝利をしていった。彼は、単純なメッセージ「神様はあなたを愛しておられる」ことを伝えただけだった。

彼の背後には、祈りの執り成し手がいた。そのうちのひとりのアメリカ人の男性は、ほとんどアラブ語を話すことさえできなかったが、熱心にこの人のために執り成していた。

その結果、ゴミ村の人々は福音に心を開き、イエス様を信じていった。しばらくすると十分な数の信徒が生まれたので、コプティック・オーソドックス教会は、彼らのために小さな会堂を建設した。

そして、彼を牧会者として立てた。彼は、ファーザー・サイモン（サイモン神父）として知られるようになった。教会が大きくなるにつれて、聖霊の働きによって信徒たちは内側から外側に向けて、変えられていった。

サイモンさんは、人々に新しい願いと動機付けを与え、稼いだお金を自分の家を建てるために使うように指導した。学校が建設され、こどもたちは教育を受け、聖書が読めるようになった。彼らは、今も同じゴミの村に住んでいるが、イエスさまの愛と力に動機付けられて変わった。そこには、アパートが建設された。

さらに聖霊様は、ある奇跡的な方法によって、ゴミ村の裏にある山の岩地に目を留めさせ、今や世界的に有名なエジプトの「岩の教会」が誕生した。2000人を収容することのできるこの「岩の教会」は、中東で最大の教会と言われ、礼拝のため、祈りのために、ゴミ村から人々が集っている。

サイモンさんの大好きなみことばが実現した。「しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。」（1コリント1：27）

更に現在は、エジプトの社会の底辺に住む人々のために、身体障害者の方々と慢性病患者の人々のケアのために完全に設備の整ったセンターが建設されている。

感想

世界宣教会議では、戦略を検討したり、方法論を学んだりする。それらも重要であるが、聖霊によって感動された1人の働きが、キリストの愛とシンプルなメッセージによって人々を変え、地域を変えることができるのだというこの証しは、日本のリバイバルにとっても重要なカギとなるに違いない。

大会の中で、「スーパースターの時代は過ぎ去った」ということが語られた。確かに、ビリー・グラハム師のような人物の時代は過ぎ去った。ただ、もう一方で、バーザル師やサイモン師のように、神の召しに応じる小さき器を主が捜しておられることも見逃してはなるまい。

2010年第三回ローザンヌ・ケープタウンの参加報告・感想
「ローザンヌ運動の幻：全世界の福音の流れを集めて、
聖書的世界宣教の大河となす。」

吉本牧人

グロリアミッション札幌キリスト教会 牧師

私がローザンヌ運動を初めて知ったのはドイツの神学校時代（1982－85）、世界宣教に関する講義が何かにおいてであった。ローザンヌ誓約と論文集を読み、当時の福音派を代表する神学者・宣教学者の聖書的宣教観に大いに啓発された。WCCの社会的福音に対し、ビリー・グラハムが指導力を発揮し、福音派の立場から聖書的宣教を主唱し、さらにジョン・ストットらが福音の社会的責任の側面を補足しようとしたものと理解した。その後、この運動は専門的な研究が継続的に深められ、すぐれた論文が発表された。

1989年、フィリピン、マニラで第二回世界大会が開催された。私は、日本で開拓一年目であったが、福音派を代表する世界宣教運動にぜひ出席したいという強い願いを持ち、その願いが叶えられ、参加する恵みに浴した。この大会も4000人程が全世界から結集し、すばらしい大会であった。第一回大会の規模と深みを継続させようとの意気込みを感じた。J・ストットがロマ書を講解し、聖書の福音を再度強調した。特に、全体集会では福音宣教の具体的な成果が多く、多くの団体から発表された。また、百を越すような分科会の他に、宣教団体などの活動を紹介するスタンドがフロア一杯に連なり、さながら世界宣教の見本市といった観があった。また、この大会では聖霊派が受け入れられ、重要な位置を占めるようになる。チャー・ヨンギが分科会の講師をし、日本人参加者では大久保みどり師が唯一人分科会で講師をされた。その後、福音派の世界宣教はAD2000運動のような世紀末を視野に入れた運動が取上げられた。

2004年、タイ、パタヤでローザンヌ・世界宣教フォーラムが開催された。この大会は、規模が小さく、今日の宣教課題について議論しようという研究会的性格で、参加者も専門的研究者・活動家が招待された。私は浅学で不適であったかもしれないが出席を許された。私は、三分の二世界という研究部会に参加し、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカにおいて爆発的に進展している宣教のみわざを目の当たりにし、励まされた。私の印象であるが、このフォーラムでは、“transformation”が非常に強調され、福音の社会的責任が前面に押し出されたように感じた。ビリー・グラハムの聖書的福音観が後退し、WCCに近づいたような印象を受けた。またこのフォーラムで発表されたが、世界のクリスチャン人口の多数派が1980年代に第一世界から第三世界に逆転したことが印象深い。しかしながら私は、二十世紀の西洋・非西洋という対立を克服し、第一世界や第三世界ではなく、もう一度「一つの世界」を回復すべきではないかという反省と挑戦を受けた。

今回の第三回ローザンヌ・ケープタウン会議では、聖書的福音宣教の原点を確認しようという印象を受けた。これまでの様々な宣教活動、社会活動の成果を踏まえつつ、聖書信仰に立った福音宣教と調和させ、統合しようという方向性を感じた。宣教団体等の宣伝は控え目で、聖書から深く学び、主イエス・キリストの福音を担い、宣べ伝えて行くとはどういうことかをじっくり問い直すことができたのではないだろうか。私自身は、福音か社会的責任かという宣教における今までの議論のように dichotomy として捉えることは無意味ではないかと気が付かされた。何日目かのステージで提示された主イエス・キリストの十字架を見て、これこそが、そしてここにのみ missio dei が顕現されていると深く感動した。社会的愛の奉仕はキリストの十字架の愛の発露であり、またそこで十字架の福音が宣教されなければ聖書的宣教とはいえないのではないか。そういう意味で、Cape Town Commitment が Love という概念で宣教を全体的に包括しているのは良く考えられたものだと感じた。テーブルでの分かち合いはすばらしい恵みであり経験であった。

今後の方向性として見守って行きたい点は、非西洋の教会のリーダーシップが世界宣教でどのように実現されて行くのかということ。エジンバラ以来この大会まで、まだ英・米を中心とする英語圏の影響力が大きい事を感じた。また、南アフリカで開催されながらアパルトヘイトや植民地時代以来の負の遺産について十分に取上げられなかったとも感じた。また今回、ローザンヌが WEA と共催しようと努力したとのことであるが、ローザンヌ運動はビリー・グラハムという伝道者が主唱した運動であり、教会主体の運動ではない。それゆえ、この運動と教会との関り、さらには WCC、カトリック教会、正教会など、本当の意味で全世界の教会との関りをどうするのか。また今回、ディアスポラや家の教会の運動が大きく紹介されたが、WEA、JEA などに入っていない草の根的な教会も存在し、しかも大きな勢力となっているということを見ていく必要があると思う。さらに今回、GlobaLink というネットワークで世界の各地と連携しながら大会が持たれたが、これからの世界の教会は、従来の教派・教会の枠を超えた世界大の**教会網**の姿が浮かんで来るのではないかという予感もした。

私は、地方の小さな教会を牧会する者であるが、世界宣教のヴィジョンと聖霊の流れを学び、その神の大いなる宣教の知恵と力を覚えつつ、最前線の持ち場で微力を尽くしたいとの思いを新たにされた。この機会を賜ったことを神に感謝し、また日本の先生方のご好意に心から感謝申し上げます。

2010年11月19日

アフリカ大陸からの喜望(Good Hope) 米内宏明

国分寺バプテスト教会牧師

現地に到着した翌日、初日のオープニング・セレブレーションに出て一つのことを決めました。この出来事を直接仲間に知らせようと。特に若い方々に知らせたいと。ブログではなく ML を使いました。ちゃんと応答し合いたかったからです。一人でも多くの人と分かち合いたい、そう思わせる、そう行動させる何かが今回のローザンヌ世界宣教会議(CT2010)にありました。

ここでのレポート(証)はそのような ML での交流で中心となったテーマを取り上げます。ですので、まったく個人的な関心で選んでいるテーマです。

～和解～

まず、私のテーブル・グループ (B-313) は、Latvia(リーダー)、Ghana(女性)、Belgium、Philippines、CanadaからのParticipantsで構成されました。印象深いことはいくつもありましたが、一点だけ書き込みます。私たちのリーダーが、「ラトビア人はロシア人から虐殺された歴史がある（そう言った彼の後ろのテーブルにロシア人がいました）。和解(赦し)と正義(正しさ)はどう両立するのか」という問いをテーブルに投げかけました。怒りにまかせての問いではなく、本当に悩んでの問いかけであることはすぐに皆が分かりました。Philippinesからの男性も呼応するように民族間、イスラムとの対立による犠牲について語りました。Ghanaからの女性も口を開き、痛みを分かち合ってくれました。それらの問いかけに今でも簡単に答えや解決など出せません。けれども、この重い問いかけをあのテーブルのみなと一緒に背負おうとしました。解決はありませんでしたが、希望を感じました。

そのような重い問いかけを私はMLの仲間に流しました。すると以下のような返信(返信のごく一部を紹介)がありました。

「毎日問いかけられています。 うーん。」

「毎朝、通勤時に先生のメールを拝見するのですが、先生からの投げかけにも言葉を失います。考えていると、もう次の日のメールがきてしまう、その繰り返しの中にあります。」

「日本にいただけでは到底及びもつかない視点へと引き上げられていくような感覚をもちながら読ませていただいています。」

「どれもとても考えさせられ、生き方や神様との関わりを探られる内容でした。和解について、ちょうど今、スリランカの事例をまとめた『平和をめざす共生神学』という本を読んでいるところです。『どうあるべき』という議論だけで終わらせず『どう実践するか』、具体的な行動が求められている時ですね。コミットメントの日本語訳が出たら、ぜひ読みたいです。」

「自分は何を当然と思っているのか、何故それを当然と思っているのか、その『当然』は、他の人の『当然』とどうちがいで、その違いは、どちらかが正しくてどちらかがまちがっているというような類の『違い』なのか、それとも単なる選択の問題なのか、その『当然』の中には主の光の中で改善すべき点はないのか・・・」

みんな自分が受け止めようと悩みつつ応答をしてくれました。このようなやりとりをしながら、私は「イエス・キリストは答えではなく、問いかけである」ということばを思い出しました。また今回の会議でも述べられていた「Listen to the Word, listen to the world」というフレーズも心に響いています。そして、十字架は単なる成功のための便利グッズとしてではなく、和解のために担うべきもの、さらに重荷

は一人で負うのでもなく、誰かにあずけるのでもなく、負い合うものと示されました。コイノニアを実感しました。

～多様性～

テーブルのグループ構成そのものがすでに世界の縮図であるdiversityを現していました。さらに会場における多くの人たちとの出会いと交流は、キリストの教会の性質である世界性をそのまま示していました。多様であるということは厳しいことです。自分の限界やフレームが常に他者によって揺れ動かされ、広げられ、さらに主の御前に自分の経験を相対化していかなければならない信仰と神学の作業からです。

MLでの返信がありました。「『当然』という感覚と誇りのせいで不問になってしまいがちな、自分の世界観、自分の認識を問い直す力（視点、目）が育てられる必要があるんだろうね。どうやったらそういうのが育てられるのだろう・・・」

日本人の弱点はここかなと直感で思います。多様性ゆえの予測しきれない状況、ごちゃごちゃ感(disorder)が苦手なことです。ある日の昼食時に、イタリアからの参加者とフットボールの会話になりました。彼らとフットボールでのボディコンタクト(試合での身体ぶつかり合い)の話に及んだとき、日本人は異質なものの(予測を超えること)へのボディコンタクトが弱いということを感じました。今回、私のテーマの一つであった「ディアスポラ」はこのような日本人の弱点に向き合うチャンスを与えてくれていると受け止めています。

さらに、私の別テーマである Sports とバプテスト関係でも出会いがありました。スポーツではモザンビークとオーストラリアからの青年たちとの出会いがありました。彼らは私も関わるスポーツ団体の働き人です。二人とも 20 代です。多くの犠牲を払ってミニストリーを展開しています。彼らとは今後の交流について具体的な意見交換ができました。若くして自らが自国のリーダーであるという意識が彼らの中に健全に育っていたからこそ、突っ込んだ話し合いができました。またバプテストの代表者とも交流できましたが、彼らの多くもまた若い世代でした。

次世代のリーダーシップも diversity の特徴の一つです。日本ではリーダーシップ移譲というと、狭い枠組みの中でのトップダウン形式の世代交代だけが意識されやすいのですが、これからは上から下への移譲にとどまらず、どの世代からもリーダーシップを世界で広く発揮できる人々が出てくる必要があります。そういう人々が青年世代からこれからも続けて登場してくることを楽しみにしています。

～イエスの受肉～

CT2010において実に多くの出会いがあり、実に多くのテーマが投げかけられ、対話をし、分かち合い、悩み、コミットしていくことを繰り返す一週間を過ごしました。その繰り返しの中で、イエスが人となってこの世界においで下された、それぞれの苦闘の現場においでくださったという恵みに応答し、生きている一人ひとりに触れられたことは大きな恵みでした。

そして、この世界にイエスがおいで下されたことで、この世界から(もっとも低い所にいる人の眼差しが)神を見上げることができるようになり、この世界のコンテクスト(この世界の現実・痛み・悲しみ)に立って聖書の約束に生きることができる強い確信を得ました。それがこの会議を通して与えられた喜望です。

第3回ローザンヌ世界宣教会議に出席して 渡部信 日本聖書協会

今回、日本のローザンヌ委員会の推薦により、第3回ローザンヌ世界宣教会議に参加できたことを感謝したい。特に2004年のタイで行われたローザンヌ委員会主催の世界宣教フォーラムに参加して以来、今回の会議でも学ばせて欲しいという願いがあつてのことだった。しかし、翌週から東京での聖書協会世界連盟（UBS）世界理事会があり、開催国の責任者として私の日程が外せず、会議の後半3日間は出席を断念せざるを得なかった。

聖書協会は世界200か国に及ぶ聖書頒布事業を、プロテスタント教会のみならず、カトリック教会、正教会も含め教派を超えて活動している。ローザンヌ誓約立案者の一人サミュエル・エスコバル師はUBSの会長として長年貢献された方である。今会議には、UBS関係者は45名ほど参加していたようだ。会場責任者のラメズ・アタラ師はエジプト聖書協会の総主事である。UBSでは2000年に世界大会をケープタウンで、2004年にイギリスのニューポートで、2010年は9月に韓国ソウルで開催し、全世界のキリスト教界の直近の情報を常に共有し合っている。私は2007年にブラジルのポルト・アレグロで行われたWCC世界大会にも出席し情報を得ることができた。

私の個人的な見解では、世界のキリスト教は、大まかにカトリック教会、正教会、そしてプロテスタント教会に分断され、プロテスタントは伝統教派（主流派）、福音派、聖霊派の3つのグループに分けることができる。これは世界中どこでも同じである。日本で言えば、NCC、JEA、NRAのグループである。勿論、どこにも属さない教派もある。

この2010年はエジンバラ100周年記念・世界宣教東京大会が聖霊派によって東京で、ローザンヌ世界宣教会議が福音派によってケープタウンで、「The Changing Contours of World Mission and Christianity」がアメリカのボストンでエジンバラ100周年を記念し、ボストン神学研究所を中心として開催された。今回のローザンヌ会議はWEAが支援母体と聞いているので、プロテスタント福音派グループのエジンバラ100周年大会と位置づけることができる。

出席したケープタウンの大会は、規模、内容においてよく準備されており、充実したプログラムであった。運動体としてのローザンヌ会議であるかぎり、「全教会」的には当然限界もあるけれども。アフリカは元々、主流派の宣教師によって開拓伝道された大陸で、南アフリカもオランダ改革派が新天地を求めて移住した後、イギリスが占領し改革派を追い出して英国国教会を広めた。その国で使われている公用語が、植民地政策と一緒に持ち込まれた主流派教会のルーツを示している。アフリカの東側は英語圏、西側がフランス語圏、北側はイスラム圏で、西アフリカは圧倒的にカトリック教会が主流である。南アフリカは最後まで白人支配で黒人差別を行ったアフリカの中で最も近代的発展をとげている国で、他の国々はもっと貧困と無明のどん底にあることを忘れてはならない。特にアフリカ諸国は独立国になってからクーデターの連続で治安が悪化し、南アフリカもアパルトヘイト廃止後、最も治安が悪い国となった。多くのアフリカの国々は1日あたりの個人所得が1から3ドル、そして人口の50%が未だ文盲である。会議中の舞台上のアフリカ人は特別で、あの会場からはとても想像できない貧困の実態がある。また、隣国のスワジランドやボツワナは世界的にもHIV感染率の最も高い国である。アフリカの経済的利権は未だ欧州の元支配国が握っている。しかし過去100年のアフリカにおけるキリスト教宣教を振り返ると、欧米の宣教師と教会の支援によってイスラム教と共存しながら増大し、布教活動が成功してきたのも事実である。けれども

昨今は欧州の主流派教会の減退と経済不況により、ラテンアメリカやアジアの教会より厳しい経済状況に置かれている。そして宣教師や教育を受けた教会教職者と住民との生活格差は大きく、キリスト教が「繁栄の福音」となりやすい。聖書協会は現在アフリカにおいて、聖書頒布数の拡大よりも、識字率向上を優先課題として考えるようになった。

「全世界」的と言うならば、今、世界で最もキリスト教宣教が拡大しているのは聖霊派の教会が多いラテンアメリカである。聖書頒布数が最も急速に伸び、北アメリカの教会が応援している。2006年のWCCの世界大会では、主流派教会が同性愛問題で混乱していた反面、ラテンアメリカの教会は様々な意味で抑圧されていた民衆が信仰復興に立ち、希望に輝いていた。このローザンヌ会議でラテンアメリカの成長があまり紹介されなかったのは基本路線の違いからだろうか。またアジアの国々で急成長しているキリスト教宣教の様子をもっと紹介されてもよかったと思う。UBSでは今年から会長職に、欧米からでなくインドのロバート・カンヴィル師が任命された。また新総主事として、英国籍ではあるがマレーシア人のマイケル・ペロー氏が来年から就任する。

大会での聖書の学びと証しは福音派の特徴がよく現されていて、主流派教会が自ら生み出した神学によって混乱しているのと対照的であった。ただ、福音宣教と社会的責任を含む「全福音」的概念は、あくまで知性の統合概念であって、WCCが1952年ドイツ、ウィリンゲンに於けるIMCの大会で討議された「神の宣教」を基本理念として歩んだ結果、両方面に行き詰まってきたが、その二の舞になる危うさもある。本来、福音とは神の国へと向かう過程で、良い実を結ぶのも福音宣教の業ではないかと思う。その点、紹介された本、Chris Wrightの「The Mission of God」は良い視座を与えている。

中国からの参加者が出国できなかったことが話題となったが、ローザンヌ会議から帰国して2週間後、中国三自愛国運動委員会主席の傅先偉氏を日本にお迎えしたので、この件を尋ねてみた。彼の返答は「ローザンヌ会議の人々と話し合いのテーブルの座にない」というものだった。すなわち立場が違って、特に宗教者は誠実な対話の場を通して物事を解決し、進展させることが大事である。自分たちが唯一正しい信仰者と考え、相手の立場を非難しては、発展は望めない。聖書協会の場合は彼らの置かれた立場（ルール）を理解し、中国の教会と信頼関係を得て、南京に聖書の印刷工場を建設した。文化大革命後、その聖書が大量に頒布されたことにより、プロテスタントのクリスチャンが100万人から公認で2200万人に成長できた。既に累計で5000万冊の聖書が中国国内で製作され頒布された。このようなあり方も神の摂理と導きだと思う。そして将来、思惑を超えて物事を変えて行くのは神の御力による。人権ばかりを訴えるジャーナリズム的なアプローチは慎むもので、それは政治的圧力の次元だ。

今、欧米の主流派の教会が「何かできることはないか」と中国の教会を公式に訪れ、話し合いの座につき、交わりと支援を申し出ている。これは世界の他宗教に対する態度も「寛容と対話」が必要とされる。大会にカトリック教会や正教会、WCCのゲストが招かれたということだが、その意味でローザンヌ会議は他者への対話路線が本当にあるのかどうか擬してみたい。中国の教会はWCCに正式に加盟し、世界大会に出席し受け入れられている。

私見と雑感を挿入しながら、第3回ローザンヌ世界宣教会議の報告書を書いてみたが、他のご意見があれば是非お聞かせくださり、実り豊かな発展がなされることを祈る。